



HITOTSUBASHI
UNIVERSITY

平成24年度

よりよい一橋ライフのために～学生生活調査とその分析



一橋大学 学生委員会

ま え が き

「平成24年度 よりよい一橋ライフのために～学生生活調査とその分析」をお届けします。

全学規模の学生調査は、これまで「学生生活実態調査」の名で平成17年度、19年度、21年度に行われてきましたが、今回、基本的な質問事項を維持しつつ、名称と調査内容の一部を改めました。それは、調査の分析結果を、学生が自分たちの学園生活をより深く理解するために役立ててほしいと考えたからです。

今回は質問の数を絞り、回答しやすくなるよう工夫しました。たとえば、これまでの質問項目から「入学について」(志望動機など)や「家庭の状況について」(主たる家計支持者に関する情報)を外しました。代わりに、「授業やゼミについて」という項目を加えました。履修行動に対するGPA制度の影響やキャップ制の認知度などを尋ねています。授業に取り組む姿勢や授業を通して、自身の学修をいかに評価するかも質問しています。大学院生には、「指導教員との関係」なども聞きました。このように、今回の調査の特徴は、学生生活でもっとも重要な授業やゼミについて多くの情報を求めたことです。

調査票の配布・回収方法についても改善を図った結果、今回はこれまでにない高率の回答を得ることができました。調査データの分析結果は、教員にも多くの示唆を与えるものです。調査の趣旨を理解し調査に協力してくださった学生の皆さんに感謝します。

平成25年12月

一橋大学 学生委員会委員長

落合 一泰



CONTENTS

I	基本事項について	学部生 大学院生	P.2
II	住居・通学について	学部生 大学院生	P.3
III	生活時間について	学部生 大学院生	P.4
IV	授業やゼミについて	学部生	P.6
V	授業やゼミについて	大学院生	P.11
VI	学生生活について	学部生 大学院生	P.16
VII	大学が行なっている各種の支援について	学部生 大学院生	P.20
VIII	経済的な状況について	学部生 大学院生	P.24
IX	進路計画について	学部生	P.26
X	進路計画について	大学院生	P.27
	編集後記		P.29

基本事項について

学部生 大学院生

学生生活の実態を把握し、今後の支援のあり方を検討するため、学部及び大学院に在籍する学生(休学・留学中を除く)を対象に、平成25年1月に『平成25年度学生生活調査』を実施しました。今回の調査は4回目です。前回は平成21年度に実施しました。

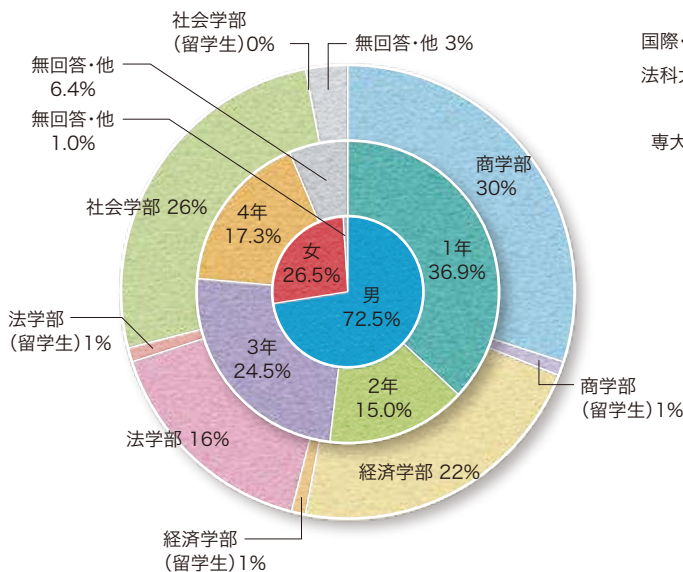
回答を寄せてくれた学生は、学部生4,450人中1,590人(回収率35.7%)、大学院生1,664人中488名(回収率29.3%)で、全体では6,114人中2,078名(回収率34.0%)の学生から回答が得られました【図表 I-1】。これは前回調査(平成21年度)の回収率(学部生13.2%、大学院生11.7%、全体12.8%)と比べて大幅に増加しています。

前回調査は平成19年度に実施した第2回調査と比較して大幅に回答率が落ち込んでおり、今回は回収率を上げるために設問数や配布・回収方法に工夫をこらしました。回収率の高まりは、これらの対応策が一定程度の効果を発揮したことを意味するよう思われます。

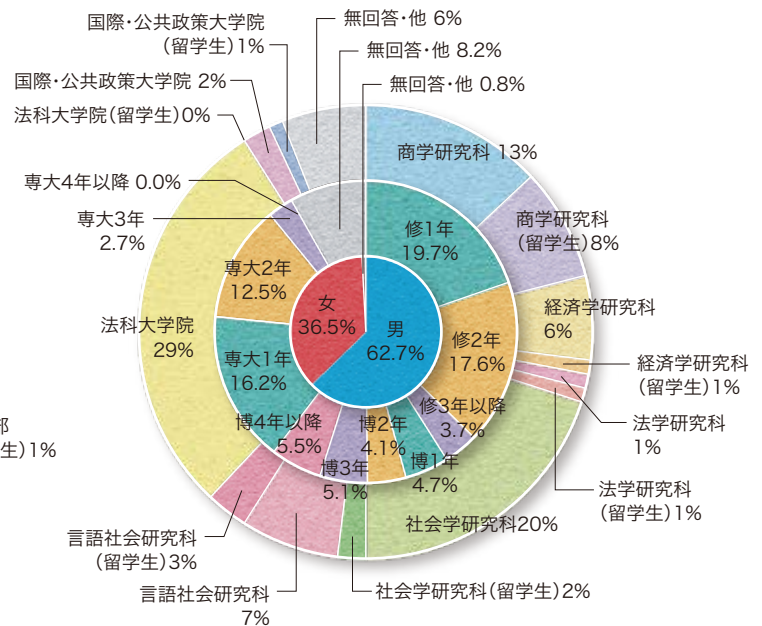
図表 I-1 回収率 全体 学部生 大学院生

	対象総数(人)	回収数(人)	回収率(%)
学部生	4,450人	1,590人	35.7%
大学院生	1,664人	488人	29.3%
全体(合計)	6,114人	2,078人	34.0%

図表 I-2 回答学生の内訳 学部生



図表 I-3 回答学生の内訳 大学院生



修:修士課程 博:博士後期課程 専大:専門職大学院

回答を寄せてくれた学生の内訳は【図表 I-2(学部生)】および【図表 I-3(大学院生)】の通りです。

学部生については、4つの学部の間あまり大きな差はありません。いずれの学部でも1年生がもっとも回答者が多く、次に3年生となっています。男女比では男性が7割を占めていますが、これは在籍学生の男女比(男子75%、女子25%)とほぼ同じです。ちなみに外国人留学生は回答者全体の約3%(学部生の在籍留学生の割合は約4%)です。

大学院生については、キャンパスが異なるためアンケートを実施しなかった国際企業戦略研究科を除くすべての研究科と専門職大学院(法科大学院、国際・公共政策大学院)の学生から回答が得られました。大学院の場合は回答率は研究科によって回答率に差が見受けられました。また、前回の調査では、日本人学生に比べ外国人留学生※1の回答率が高かったのですが、今回は外国人留学生の回収率は24.9%にとどまりました。しかし、本調査が外国人留学生の状況や意見を知るための優れた資料になっていることには変わりありません。

※1 この場合の「外国人留学生」とは、在籍資格が「留学」であることです。

II

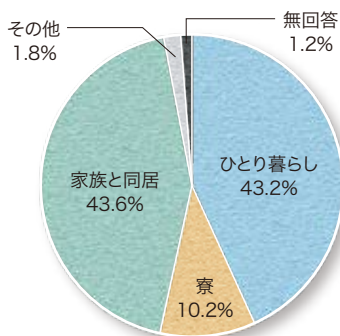
住居・通学について

学部生 大学院生

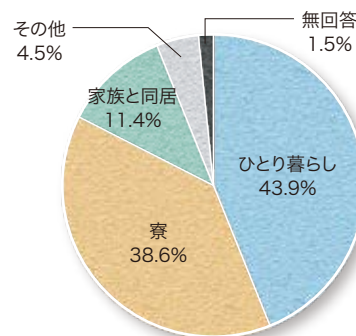
住居に関しては、学部生の場合は自宅外が52.1%（寮8.9%、ひとり暮らし43.2%）、家族と同居している者が45.2%となっているのに対し、大学院生は自宅外が57.6%（寮14.3%、ひとり暮らし43.2%）、家族と同居する者が38.3%と自宅生の比率がより低いことがわかります。寮に住む割合が学部生よりもやや高い点も、大学院生の特徴です【図表II-1】。

以上は全体の集計にみられる特徴です。留学生のみを集計すると学部生は自宅外が79.2%（寮47.9%、ひとり暮らし31.3%）、大学院生は84.5%（寮33.3%、ひとり暮らし51.2%）と自宅外生の比率がより高くなります【図表II-2】。

図表II-1 住居形態 学部生 大学院生



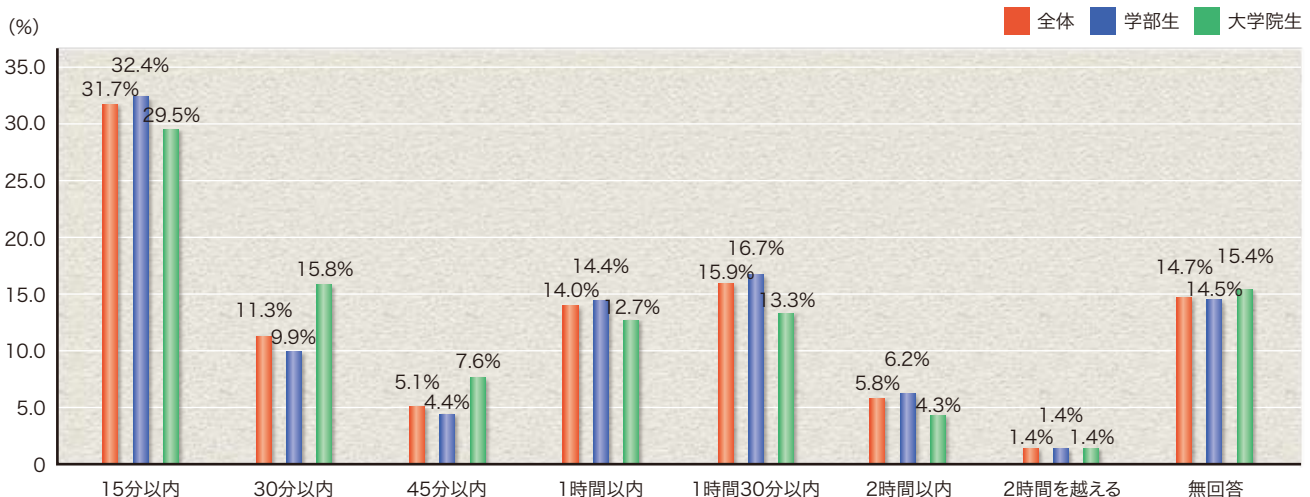
図表II-2 住居形態 留学生のみ



通学時間は片道15分以内が最も多く31.7%（学部生32.4%、大学院生29.5%）、30分以内とあわせると43.0%（学部生42.3%、大学院生45.3%）となり、4割強の学生が30分以内の、比較的大学に近い圏内に暮らしていることがわかります【図表II-3】。

この割合は前回調査（平成21年度：30分圏内50.1%[全体]）と比べるとやや低下していますが、今回の調査では無回答者の割合が1.0%から14.7%に増えており、その影響があるかもしれません。試しに無回答者を除いて集計すると30分圏内に住む学生は50.5%と前回とほぼ同じ結果となります。

図表II-3 片道の通学所要時間 全体 学部生 大学院生



通学に利用する交通機関は[鉄道]が最も多く44.0%（学部生44.4%、大学院生42.6%）、次に[自転車]が36.9%（学部生、39.2%、大学院生29.2%）であり、[徒歩のみ]が14.4%[学部12.0%、大学院22.2%]でした。鉄道の利用率にはほとんど違いがみられず、選択肢の順序も①鉄道、②自転車、③徒歩と同じですが、学部生は自転車を利用する傾向が強く、大学院生は徒歩による通学者も2割強と一定数存在する点が特徴的でした。バスの利用者は全体で2.5%（学部2.4%、大学院3.1%）とわずかです。

III

生活時間について

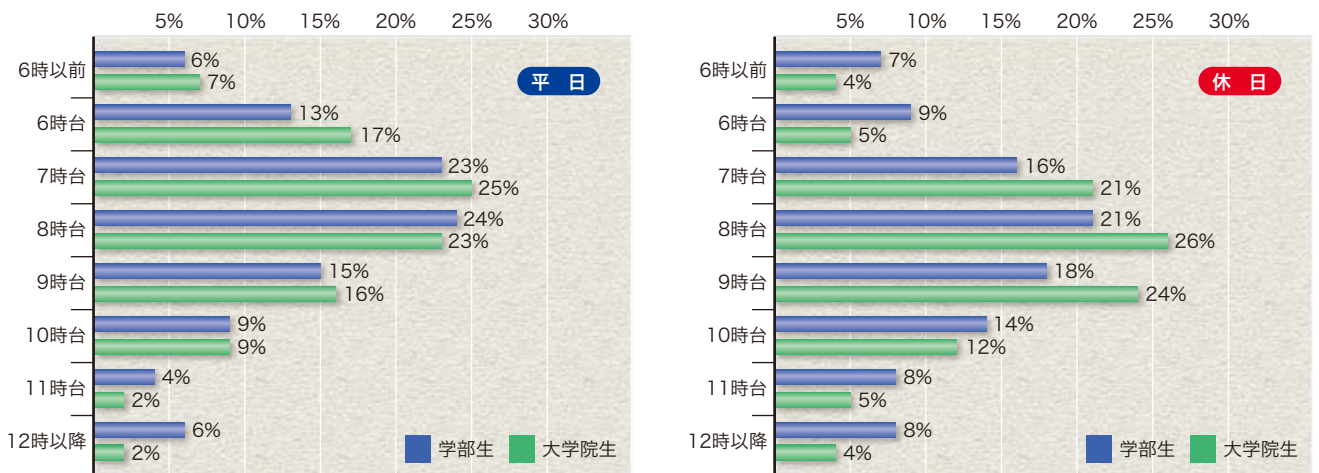
学部生 大学院生

通学頻度や生活時間などの質問にあたって、今回の調査では「一週間あたりの」とは聞かず、「昨日の」と特定して尋ねています。それによって、回答者が自分の生活を正確に振り返ることができます。また、平日と休日の違いも回答に反映されるという利点もあります。

調査時点の前日が平日であったとする回答は全体の76.4%で、休日(土・日・祝日)であったのは22.4%と、平日と休日の比率は実際の曜日のそれに近いバランスのとれた結果となっています。残りの1.2%に相当する回答は、昨日の日付・曜日が空欄でした。以後は、これらを平日についての回答に含めて集計します【図表Ⅲ-1】。

図表Ⅲ-1 「昨日の」(調査時点の前日)の起床時刻

学部生 大学院生



回答者の約半数は、平日の起床時刻が7時～9時の間であると答えています【図表Ⅲ-2】。起床時刻の平均を比べると、休日のほうが平均起床時刻は約40分遅くなっています。また、大学院生のほうが学部生に比べ、平均して20分ほど起床時刻が早い傾向がうかがわれます。

図表Ⅲ-2 平均起床時刻

学部生 大学院生

	学部生	大学院生
平日	8:04	7:44
休日	8:40	8:25

朝食に関する質問については、回答者の約7割が朝食をとったと答えています【図表Ⅲ-3】。朝食をとらなかった学生と平均起床時刻を比較してみると、1時間以上の差があり、特に学部生では朝食をとらなかったと答えた学生の平均起床時刻は1時間44分遅いという結果になりました。朝食をとる時間をすぎても寝ている、あるいは講義開始ぎりぎりまで寝ているようです。

図表Ⅲ-3 朝食の有無と平均起床時刻

学部生 大学院生

	学部生		大学院生	
	割合	平均起床時刻	割合	平均起床時刻
朝食をとった	71.4%	7:33	72.3%	7:26
朝食をとらなかった	28.6%	9:17	27.7%	8:38

大学に来ていた学生の割合を集計すると、次のようになります【図表Ⅲ-4】。昨日が平日であった回答者のうち、そのときに大学に来ていたと回答する割合は約6～7割で、30～40%の学生は大学に来ていません。休日については大学院生の約2割が大学にいたと回答しており、休日でも勉学・研究のために通学している大学院生が少なからずいます。

図表Ⅲ-4 「大学に来ていた」という回答の割合

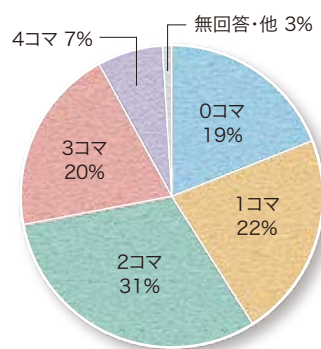
学部生 大学院生

	学部生	大学院生
平日	67.1%	58.1%
休日	7.4%	19.8%

平日に大学に来た学部生は、73.3%が午前中に大学に到着しています。また、大学を出た時間についてみると、39.6%が15時までに、44.7%が15時～19時の間に、10.6%が20時以降となっています(図表は省略)。

さらに、平日における学部生の講義の履修および出席について回答を求めたところ、平均1.76コマ(講義)を履修していることがわかりました。円グラフに示されているように、履修コマ数の分布は概ね均等です【図表Ⅲ-5】。

図表Ⅲ-5 平日の履修コマ数 学部生

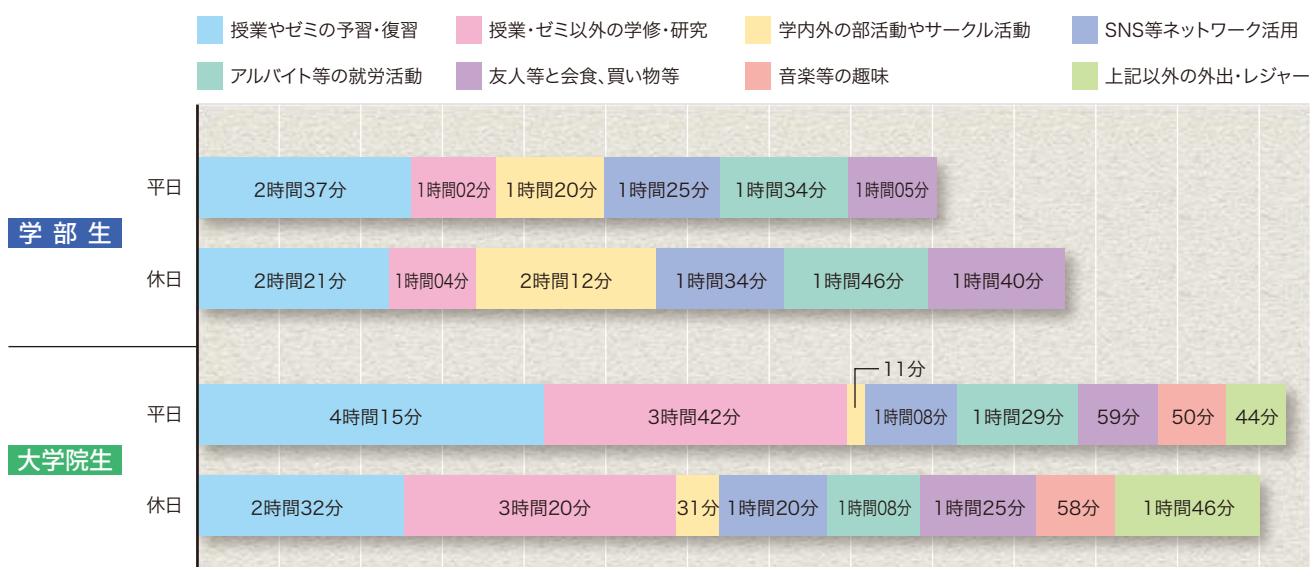


履修している講義の数と、実際に出席した講義の数を比較することで計算される講義出席率は全体で67.8%でした。履修コマ数ごとの出席率についてみると、3コマを履修している学生の場合72.9%と最も高いですが、1・2・4コマでは概ね65%前後で全体平均との相違は少なくなっています。

時間の使いかたについて、学部生は6項目、大学院生は8項目について、それぞれ過ごした時間の長さを回答してもらいました【図表Ⅲ-6】。平均値をみると、学部生は1日あたり約2時間半の予習復習にくわえ、1時間の勉強時間をとったと回答しています。しかし、「学部生平日(学部生休日)」の回答者の32.9%(41.1%)は、予習復習にあてた時間が1時間未満であるか無回答であり、必ずしも全員が毎日のように1日2時間程度の学習をしているわけではありません。

また、学部生が休日に部活動・サークル活動に平均して2時間12分を費やしたという結果になっていますが、学部生休日の回答者の67.3%はこの活動に使った時間は0時間あるいは無回答となっています。当然のことながら、特に休日の過ごし方には大きな個人差が存在します。

図表Ⅲ-6 平日と休日の活動時間の内訳 学部生 大学院生



IV

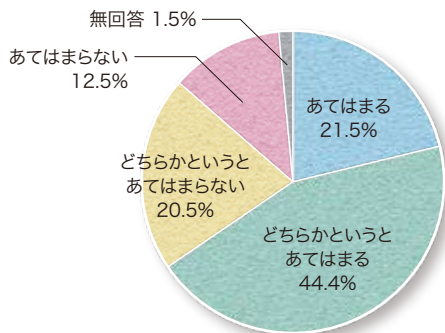
授業やゼミについて

学部生

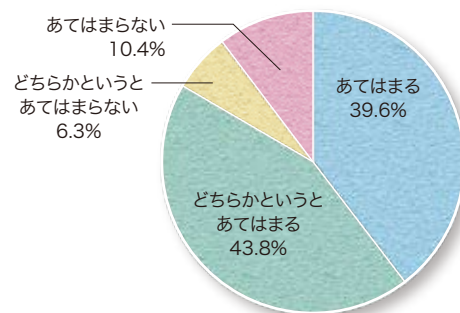
履修登録した授業に必ず出席するかとの問いに対し、「あてはまる」「どちらかというあてはまる」と回答した者の数は65.5%と約3分の2を占めています。残りの3分の1は、「あてはまらない」「どちらかというあてはまらない」と回答した学生です【図表IV-1】。

これを留学生に限ると、「あてはまる」「どちらかというあてはまる」と回答した学生は83.4%とかなり高率になり、学生全体から見て、勉学意欲が高いことが読み取れます【図表IV-2】。

図表IV-1 「履修登録した授業には必ず出席している」への回答 学部生全体

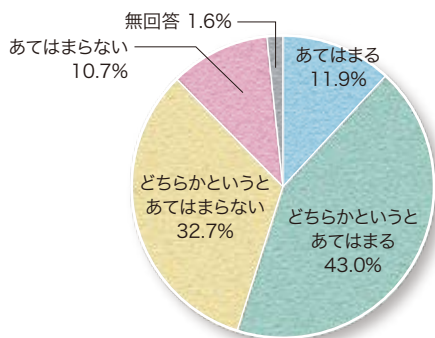


図表IV-2 「履修登録した授業には必ず出席している」への回答 留学生のみ

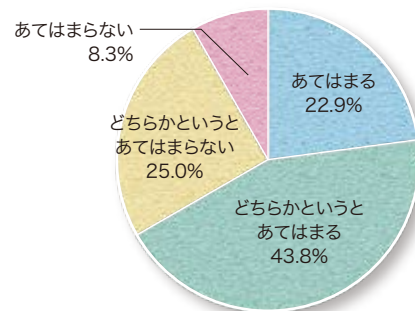


授業は興味がわくものが多いかとの問いに対し、「あてはまる」「どちらかというあてはまる」が54.9%と半数をやや超えますが、「あてはまらない」「どちらかというあてはまらない」も43.4%います【図表IV-3】。留学生においては「あてはまる」「どちらかというあてはまる」が66.7%と学部生全体を上回る結果になっています【図表IV-4】。

図表IV-3 「授業は興味のあるものが多いと思う」への回答 学部生全体

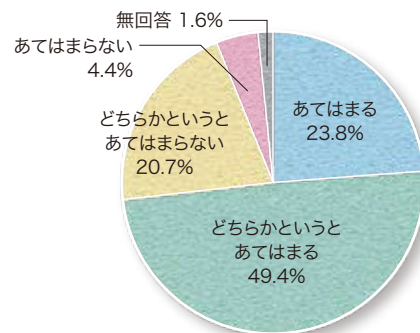


図表IV-4 「授業は興味のあるものが多いと思う」への回答 留学生のみ



「授業内容を難しいと思うことがあるか」との問いに対し、「あてはまる」と答えた学生が23.8%おり、「どちらかといえばあてはまる」と答えた学生を合わせると、73.2%と高率でした【図表IV-5】。もっともこの点は、授業の準備に費やした時間、および教員への質問の頻度と相関を持つものであり、予習・復習の指示やオフィスアワーの活用をこれまで以上に促すことにより、改善可能なように思われます。

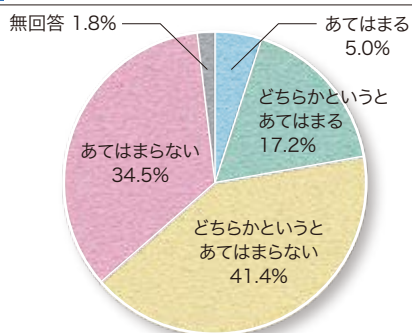
図表IV-5 「授業内容を難しいと思うことがあるか」への回答 学部生全体



「分からないことは教員に質問するようにしているか」との問いに対し、「あてはまる」「どちらかというあてはまる」が22.2%と低率です【図表IV-6】。分からないことがあってもそれを尋ねないというのは、自己解決できるのでない限り、好ましいことではありません。

これを留学生に限ると、「あてはまる」「どちらかというあてはまる」が52.1%と、授業に対してかなり積極的な姿勢を示しています【図表IV-7】。

図表IV-6 「授業でわからないところは教員に質問するようにしている」への回答 学部生全体

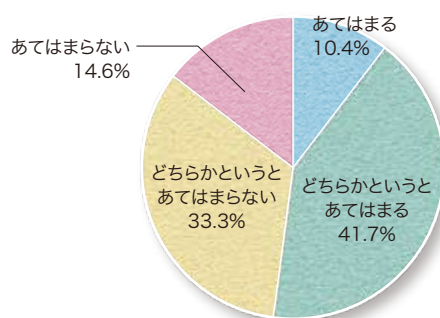


「ゼミに必ず出席しているか」との問いに対し、「あてはまる」が57.7%と割合として最も多くなっていますが、「どちらかといえばあてはまる」と合わせても68.5%にしかありません【図表IV-8】。ただし、無回答が25.1%と他の質問に比べて多いことから、3年からの後期ゼミに参加する以前の1・2年生が全体数に含まれると推測されます。そこでこれを除いて再計算すると、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の合計は91.5%となり、こちらが実体に近いと思われます。

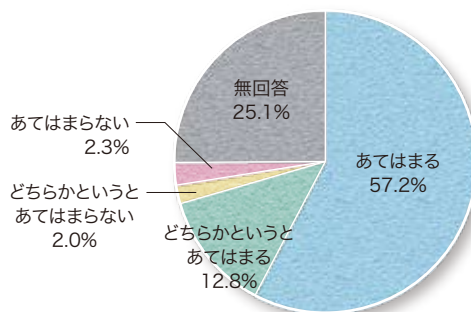
「ゼミの内容は興味深いか」との問いに対し、「あてはまる」が46.2%、これに「どちらかというあてはまる」を加えた学生の割合は67.5%です。上記と同じく、無回答を除いて再計算すると90.1%となり、ゼミに対し、相当程度満足していると推測されます【図表IV-9】。

「ゼミでの発表やその準備は難しいと思う」の問いに対し、「あてはまる」「どちらかというあてはまる」と回答した学生は58.0%です【図表IV-10】。無回答を除外して再計算すると77.6%となります。多くの学生がゼミの内容に興味深いものだとして認識していることと合わせて考えると、ゼミ教育によって学生が鍛えられている様子が読み取れます。

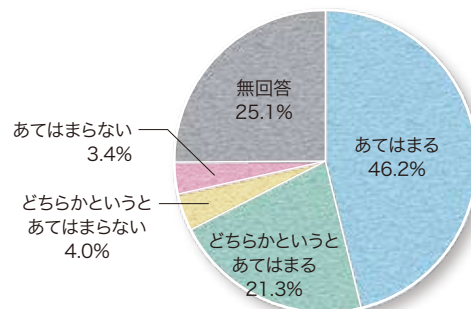
図表IV-7 「授業でわからないところは教員に質問するようにしている」への回答 留学生のみ



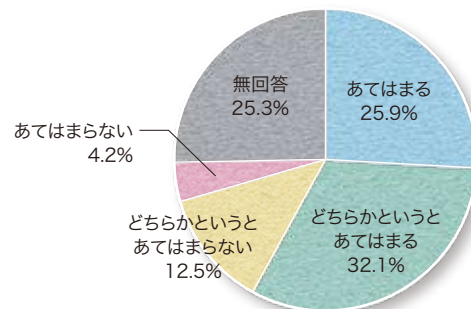
図表IV-8 「ゼミに必ず出席している」への回答 学部生全体



図表IV-9 「ゼミの内容は興味深いものだと思う」への回答 学部生全体



図表IV-10 「ゼミでの発表やその準備は難しいと思う」への回答 学部生全体

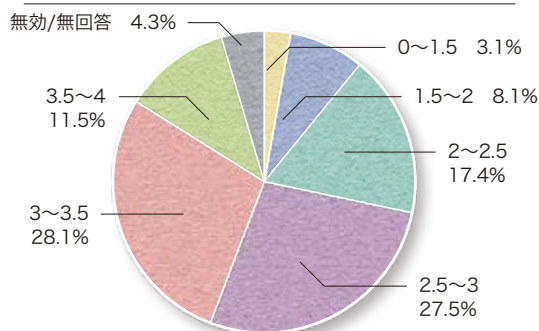


授業やゼミについて 学部生

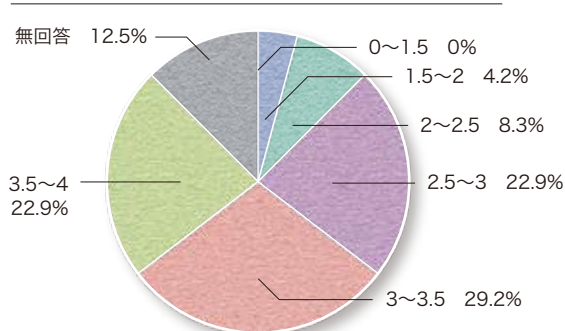
GPAの分布は[図表IV-11]に示す通りです。GPAが2.0から2.5までの学生が17.4%、2.5から3.0の学生が27.5%、3.0から3.5の学生が28.1%で、3.5から4の学生が11.5%と、これらの学生が全体の約9割を占めます。残りの約1割はGPAが2に届きませんでした。

対象を留学生に限ると、GPAが2.5から3.0が22.9%、3.0から3.5が29.2%、3.5から4.0が22.9%と、かなり高いことがわかります[図表IV-12]。項目[図表IV-14、図表IV-16]で明らかにされているように、留学生の方が、GPAへの影響を考慮に入れた履修選択を行ったり、履修撤回を使用する頻度が高いことを考慮に入れると、留学生の方が、好成績を確保しGPAを上げる努力をしていると推測されます。

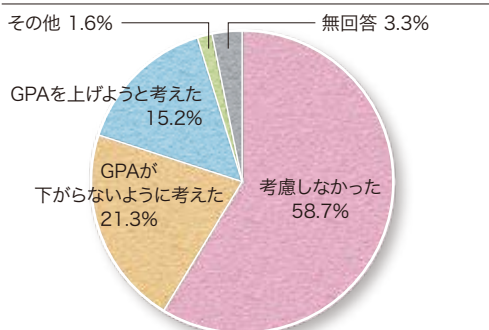
図表IV-11 学期末までの通算GPA 学部生全体



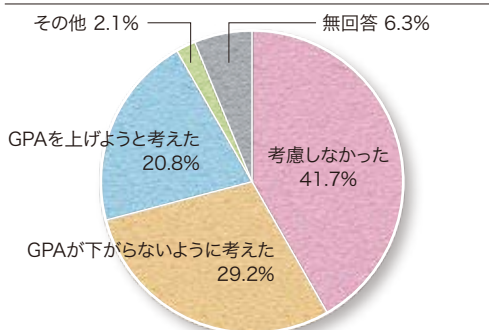
図表IV-12 学期末までの通算GPA 留学生のみ



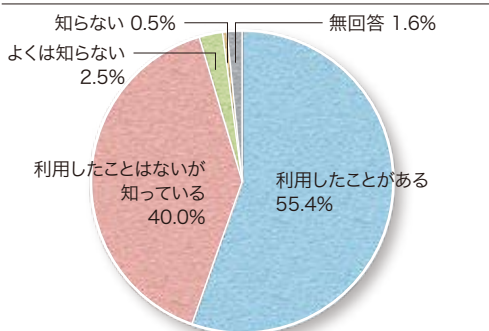
図表IV-13 今学期の履修科目を決める際に自分の通算GPAを考慮したか 学部生全体



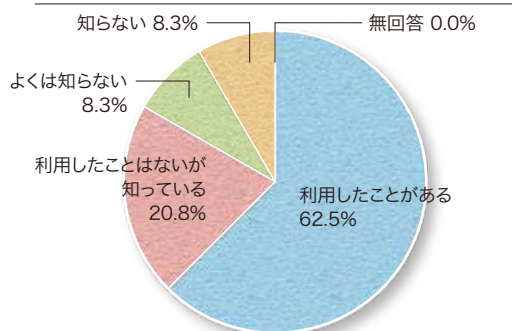
図表IV-14 今学期の履修科目を決める際に自分の通算GPAを考慮したか 留学生のみ



図表IV-15 履修撤回(W)の利用について 学部生全体



図表IV-16 履修撤回(W)の利用について 留学生のみ

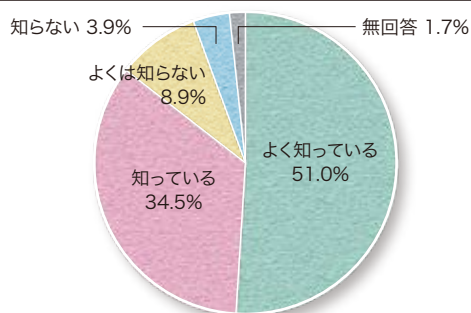


自由記述欄では、GPA制度に対するさまざまな意見が書かれました。ポジティブな意見としては、「授業にまじめに出るようになった」、「勉強へのモチベーションが上がった」などがありました。他方、ネガティブな意見としては、「勉強の負担が増える」、「評価の甘い授業に履修が偏る」などがありました。(なお、履修行動の変化に関する分析では、全体として、評価の甘い授業に履修が偏るという明確な動きはこれまでのところ見受けられません。)

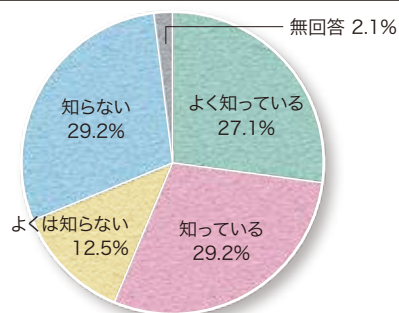
履修キャップ制について「よく知っている」「知っている」と回答した学生が合わせて85.5%おり、ほとんどの学生に周知されている実態が明らかになりました。ただし留学生に限れば56.3%と、基本的かつ重要な事項でありながら十分には知られていない実態が浮かび上がります【図表IV-17、図表IV-18】。

自由記述欄を見ると、「キャップ制の意義がわからない」といった記述が多く見られました。「履修講義数を制限することにより、各教科をじっくり学んでもらう」というキャップ制の意義への理解がそれほど進んでいないようです。

図表IV-17 履修キャップ制に関する認識 学部生全体



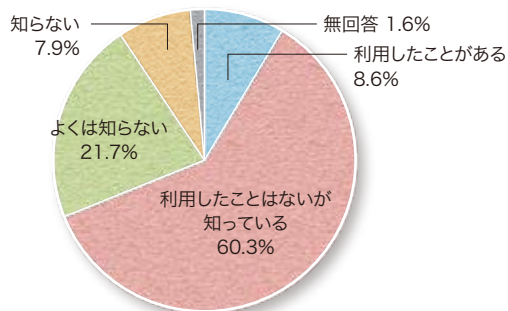
図表IV-18 履修キャップ制に関する認識 留学生のみ



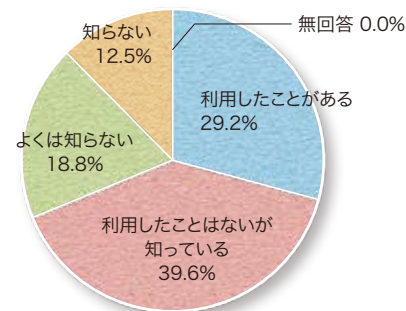
履修撤回制度の利用経験者は、全体で見れば55.4%ですが、留学生に限れば62.5%と、留学生の利用がかなり多いことがわかります【図表IV-15、図表IV-16】。

成績説明請求制度の利用経験者は、全体で見れば8.6%にとどまりますが、留学生に限れば29.2%とかなり多くなります【図表IV-19、図表IV-20】。

図表IV-19 成績説明請求制度について 学部生全体

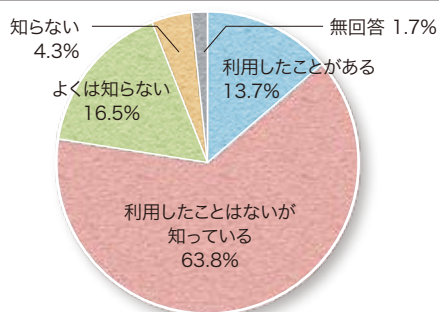


図表IV-20 成績説明請求制度について 留学生のみ

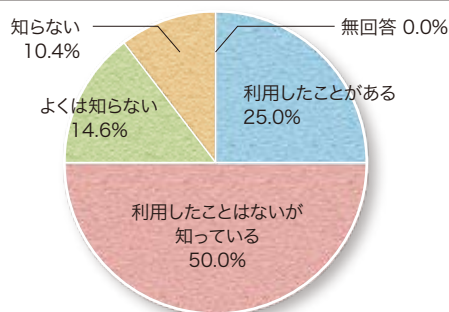


教員のオフィスアワーの利用経験者は、全体で見れば13.7%のところ、留学生に限ると25.0%となります【図表IV-21、図表IV-22】。

図表IV-21 オフィスアワーの利用経験 学部生全体



図表IV-22 オフィスアワーの利用経験 留学生のみ



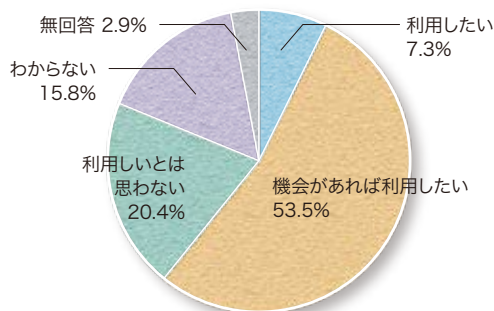
これまで、履修にかかわる制度や仕組みについてみてきましたが、学生全体で見れば、履修にかかわる制度についての理解度は高い結果となりました。留学生においてもこのことが当てはまるほか、好成績を残すために制度を利用している実態もうかがわれます。また、制度のみならず自習室等の設備の利用度も高いことがわかりました。

授業やゼミについて 学部生

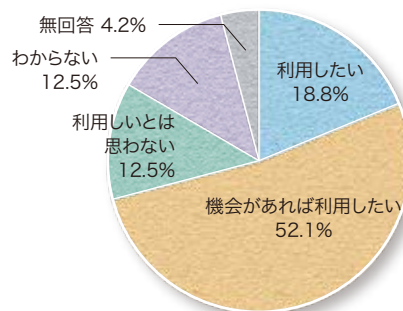
次に、学修支援の機会に関する質問への回答を見ていきましょう。

「学修支援の機会を利用したいか」との問いに対し、「利用したい」「機会があれば利用したい」が学生全体で60.8%と相応の割合を占めていました。これを留学生に限ると80.9%とさらに高い割合になります【図表IV-23、図表IV-24】。

図表IV-23 学修支援の機会を利用したいか 学部生全体

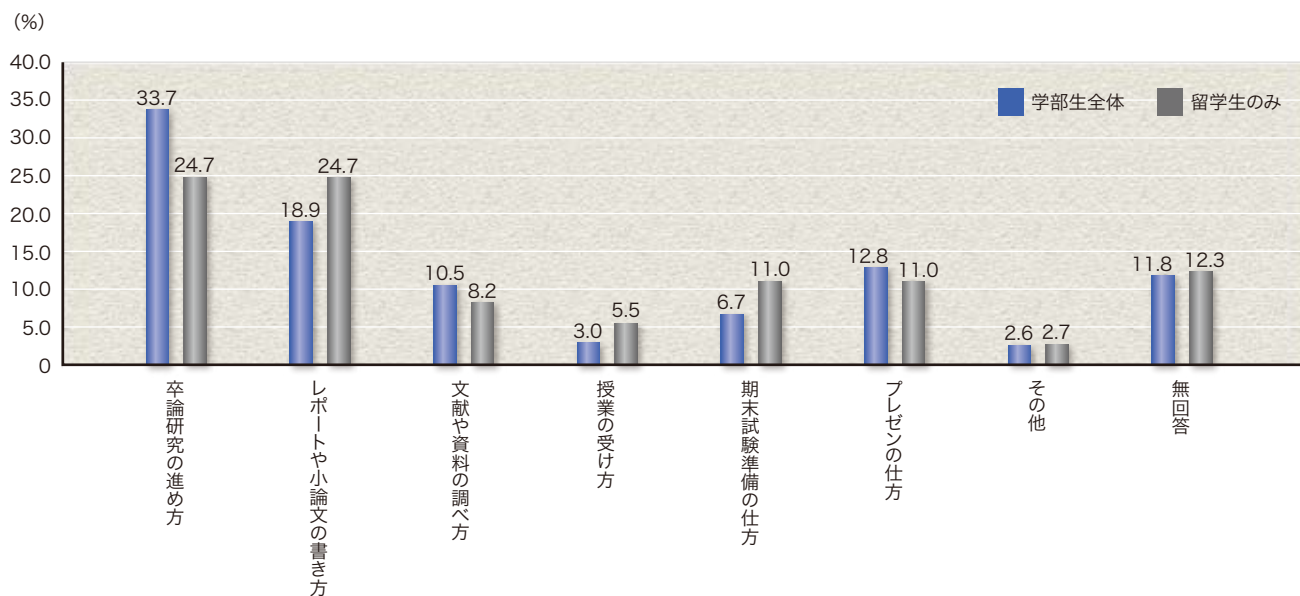


図表IV-24 学修支援の機会を利用したいか 留学生のみ



学修支援を受けたいと考える事項をさらに細かく見ていくと、ゼミにおける学修に関連したもの(卒論研究の進め方、レポート・小論文の書き方、プレゼンテーションの方法)が多くなりました。この傾向は留学生でも同様です【図表IV-25】。

図表IV-25 利用するとすればどのような学修支援を受けたいか 学部生全体 留学生のみ



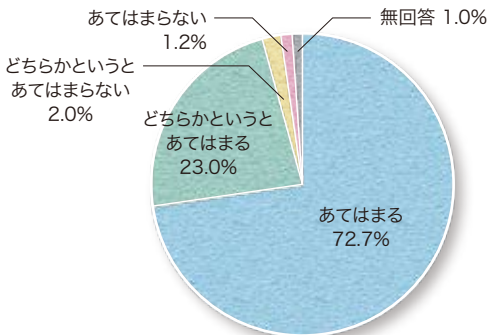


授業やゼミについて

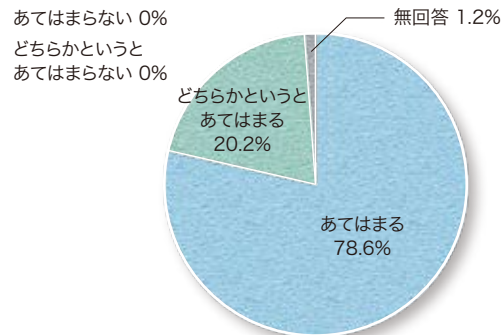
大学院生

「履修登録した授業には必ず出席している」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が72.7%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者は23%で、合計すると95.7%と学部生に比べて明らかに高い数字になりました【図表V-1】。留学生に限るとその傾向は強まり、「あてはまる」と回答した者が78.6%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者が20.2%となります。留学生の方がより積極的に授業に出席しています【図表V-2】。

図表 V-1 「履修登録した授業には必ず出席している」への回答 大学院生全体

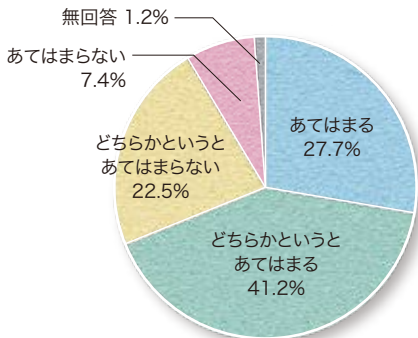


図表 V-2 「履修登録した授業には必ず出席している」への回答 留学生のみ

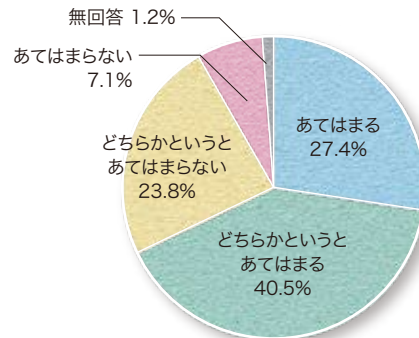


「授業内容が難しいと思うことがある」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が27.7%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者が41.2%、合計すると68.9%です【図表V-3】。この傾向は、留学生に限った場合も変わりません【図表V-4】。学部生に比べて「あてはまる」と回答した者が多いのは、より高度な学習内容であるがゆえであると考えられます。

図表 V-3 「授業内容が難しいと思うことがある」への回答 大学院生全体

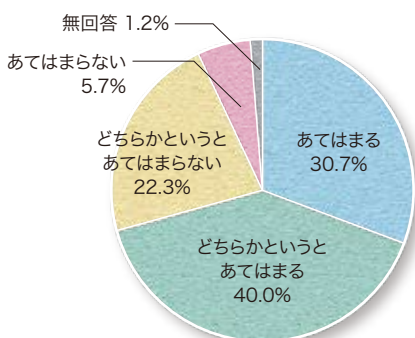


図表 V-4 「授業内容が難しいと思うことがある」への回答 留学生のみ

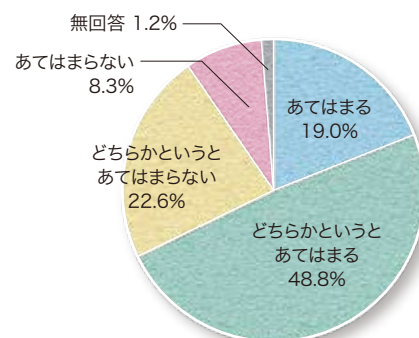


「専門科目の基礎知識が足りない」という問いに対し、「あてはまる」と回答した者が30.7%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者が40%で、合計すると70.7%です【図表V-5】。留学生に限ると、「あてはまる」と回答した者が19.8%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者が48.8%です【図表V-6】。日本人学生の方が基礎知識の不足をより強く感じています。

図表 V-5 「専門科目の基礎知識が足りない」への回答 大学院生全体



図表 V-6 「専門科目の基礎知識が足りない」への回答 留学生のみ

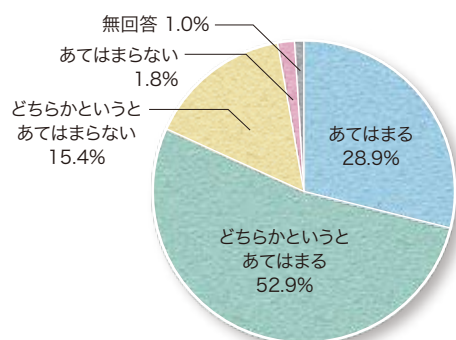


授業やゼミについて

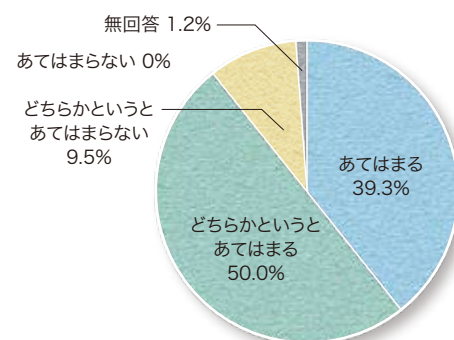
大学院生

「授業やゼミで紹介された参考文献は読むようにしている」という問いに対し、「あてはまる」と回答した者が28.9%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者が52.9%、合計すると81.8%です【図表V-7】。留学生に限ると、それぞれ39.3%と50%で、合計は89.3%に達します【図表V-8】。留学生がより積極的に参考文献に当たる作業を行っています。

図表 V-7 「授業やゼミで紹介された参考文献は読むようにしている」への回答 大学院生全体

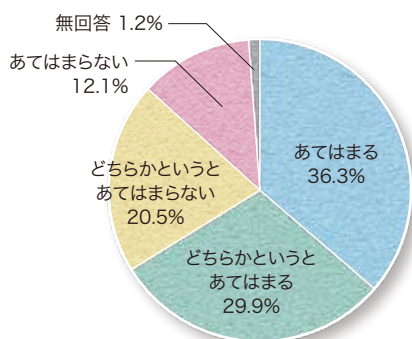


図表 V-8 「授業やゼミで紹介された参考文献は読むようにしている」への回答 留学生のみ

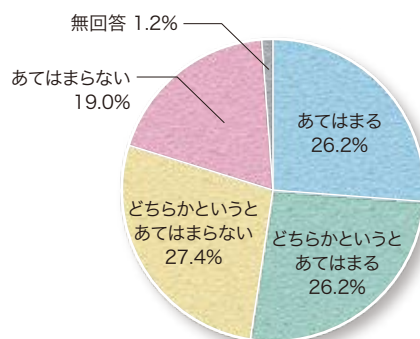


「語学能力が足りない」という問いに対し、「あてはまる」と回答した者が36.3%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者は29.9%で、合計すると66.2%です【図表V-9】。留学生に限ると、ともに26.2%と、留学生の方が語学能力不足を感じていないことが分かります【図表V-10】。

図表 V-9 「語学能力が足りない」への回答 大学院生全体

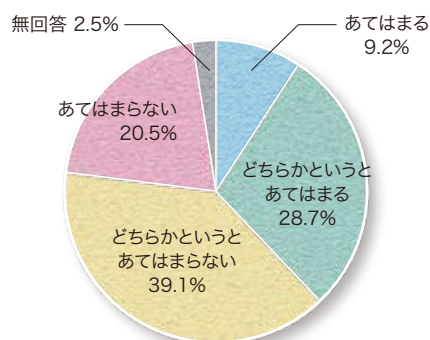


図表 V-10 「語学能力が足りない」への回答 留学生のみ

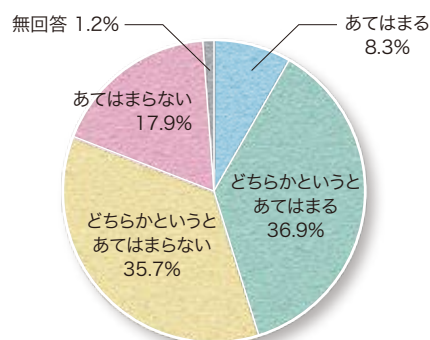


「研究の進め方が分からない」という問いに対して「あてはまらない」、「どちらかというにあてはまらない」という答えが59.6%となり、「あてはまる」、「どちらかというにあてはまる」の37.9%を約20ポイント上回りました【図表V-11】。ただし、留学生に限ると、それぞれ53.6%と45.2%となり、研究の進め方に不安を持つ学生の方が多くなります【図表V-12】。

図表 V-11 「研究の進め方が分からない」への回答 大学院生全体

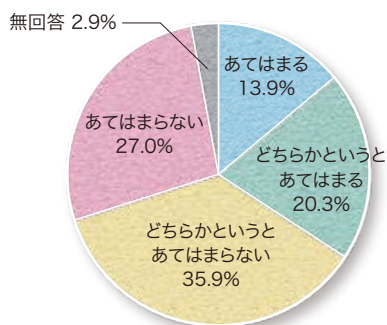


図表 V-12 「研究の進め方が分からない」への回答 留学生のみ

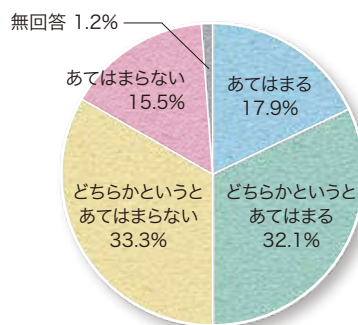


「研究テーマに迷いが生じている」という問いについては、留学生の悩みが深いことが明らかになりました。大学院生全体では、「あてはまる」と回答した者が13.9%、「どちらかというにあてはまる」と回答した者が20.3%で、合計すると34.2%です【図表V-13】。他方、留学生に限ると、その数字はそれぞれ17.9%と32.1%、合計では50%にも達しています【図表V-14】。研究テーマ設定についてより手厚い指導が望まれます。

図表 V-13 「研究テーマに迷いが生じている」への回答 大学院生全体

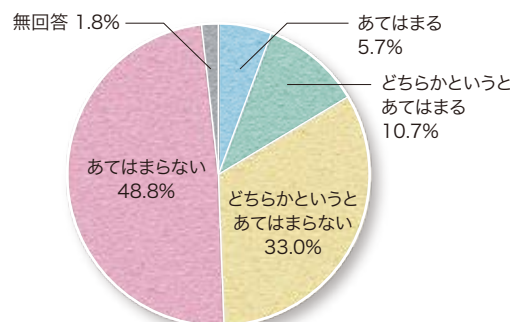


図表 V-14 「研究テーマに迷いが生じている」への回答 留学生のみ

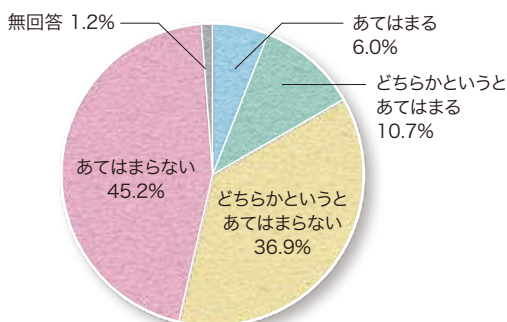


「授業やゼミでの人間関係になじめない」という問いに対し、「あてはまる」と答えた者が5.7%、「どちらかというにあてはまる」は10.7%です。15%程度の学生が人間関係に悩んでいるという傾向は、留学生に限定しても変わりません【図表V-15、図表V-16】。

図表 V-15 「授業やゼミでの人間関係になじめない」への回答 大学院生全体

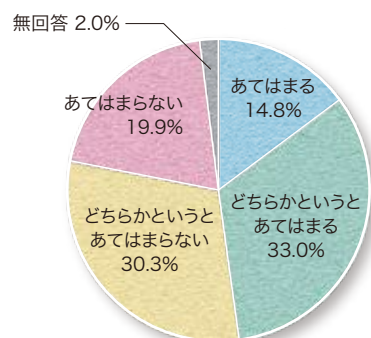


図表 V-16 「授業やゼミでの人間関係になじめない」への回答 留学生のみ

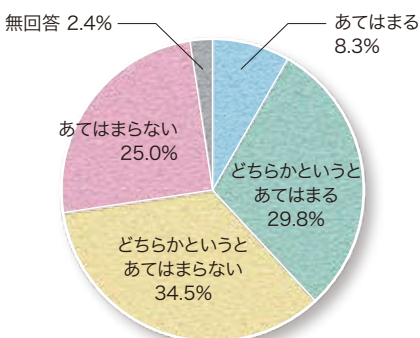


「ゼミなどでの発表やレジュメ作成は難しいと思う」という問いに対し、「あてはまる」が14.8%、「どちらかというにあてはまる」が33%で、合計は47.8%です【図表V-17】。留学生に関してみると、この2項目を合算した比率は38.1%であり、相対的に難しさを感じていないようです【図表V-18】。

図表 V-17 「ゼミなどでの発表やレジュメ作成は難しいと思う」への回答 大学院生全体



図表 V-18 「ゼミなどでの発表やレジュメ作成は難しいと思う」への回答 留学生のみ

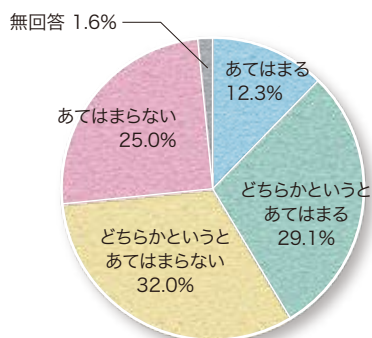


授業やゼミについて

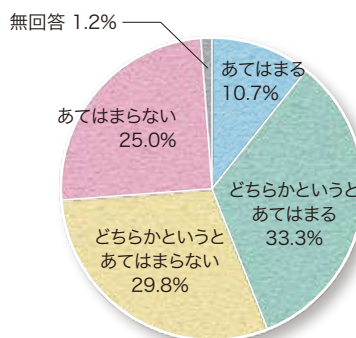
大学院生

「ゼミなどで発言するのは難しいと思う」という問いに対し、「あてはまる」が12.3%、「どちらかというにあてはまる」が29.1%と、4割の学生が発言の難しさを感じています【図表V-19、図表V-20】。

図表V-19 「ゼミなどで発言するのは難しいと思う」への回答 大学院生全体

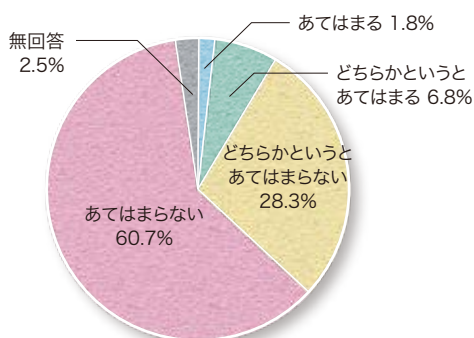


図表V-20 「ゼミなどで発言するのは難しいと思う」への回答 留学生のみ

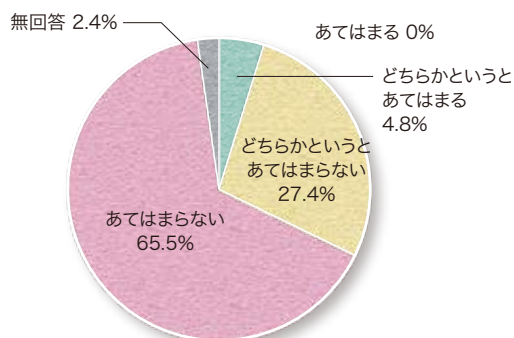


「指導教員との関係がうまくいかない」という問いに対し、「あてはまる」が1.8%、「どちらかというにあてはまる」が6.8%、合計すると8.6%です。1割弱の学生が指導教員との関係について多少なりとも悩んでいる様子が見えます【図表V-21、図表V-22】。ただし、留学生に限った場合、その比率は大きく減少しています。

図表V-21 「指導教員との関係がうまくいかない」への回答 大学院生全体

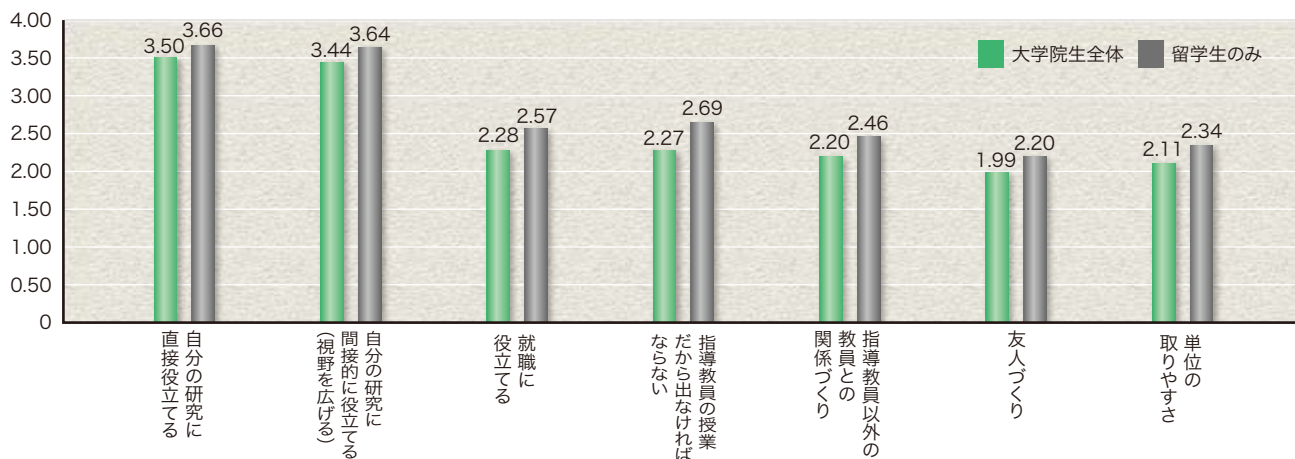


図表V-22 「指導教員との関係がうまくいかない」への回答 留学生のみ



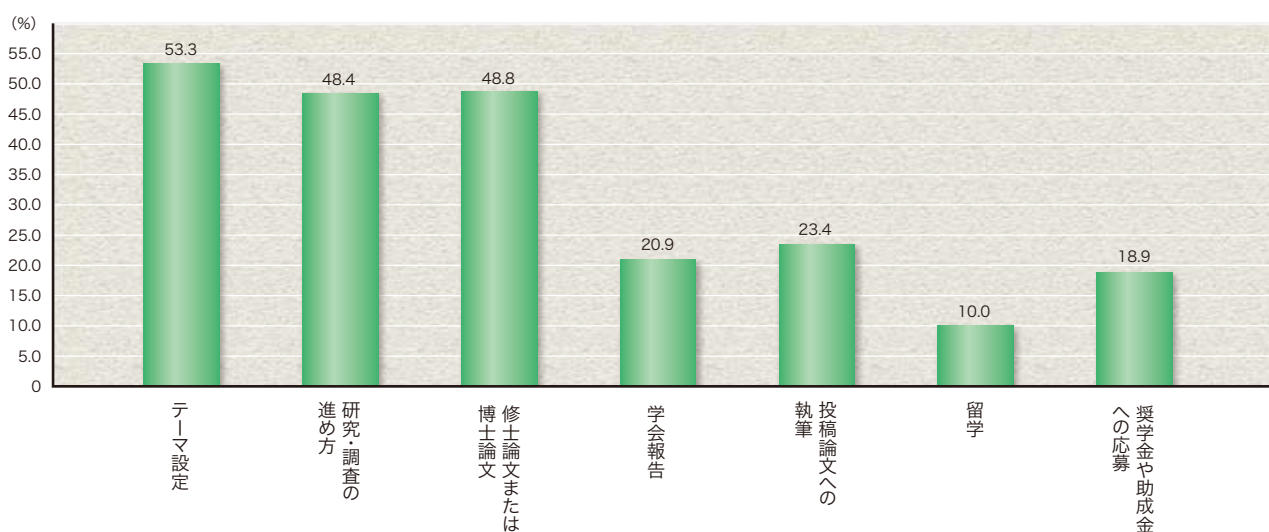
今回の調査では、授業を履修／聴講する際に7つの点についてどの程度重視しているのかをたずねています。各選択肢のうち、「重視している」を4点、「すこし重視している」を3点、「あまり重視していない」を2点、「重視していない」を1点として、平均点を項目ごとに計算した結果が【図表V-23】です。他の項目と比較すると「自分の研究に直接役立つ」(3.5)と「自分の研究に間接的に役立つ(視野を広げる)」(3.44)の2つが高くなっています。

図表V-23 授業を履修・聴講する際に重視すること 大学院生全体 留学生のみ



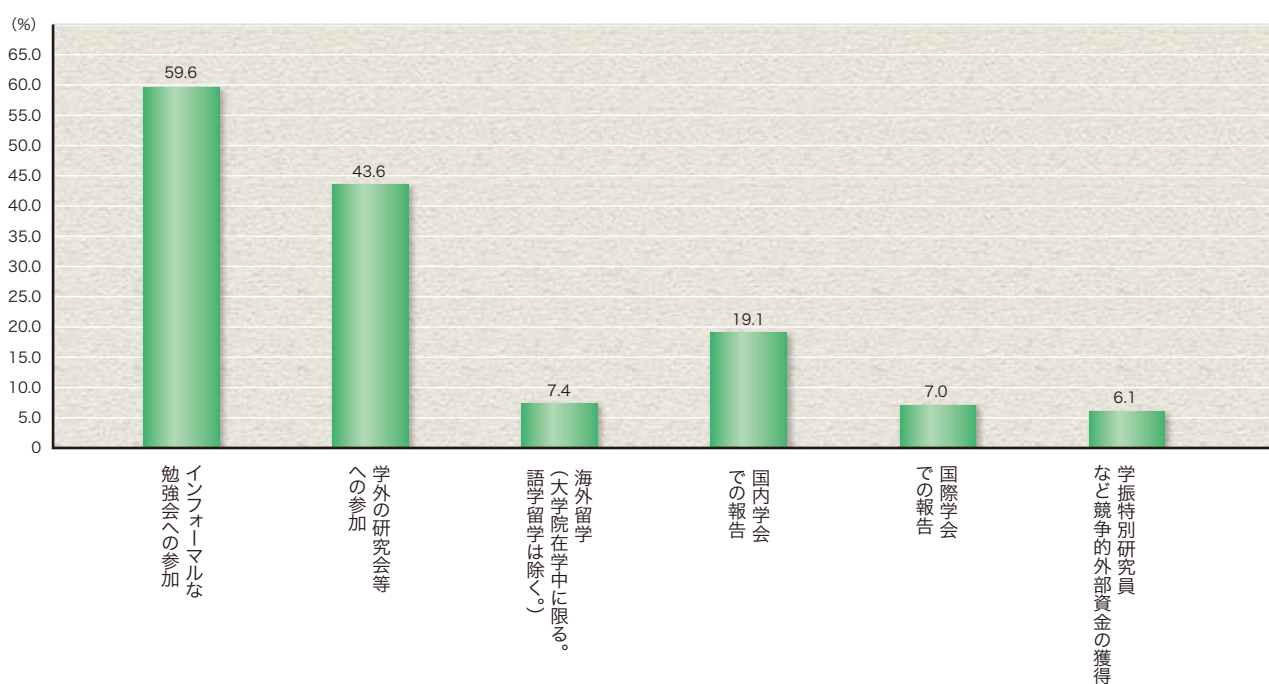
「研究活動で相談した際、もっとも力になってくれた人」について尋ねたところ、「だれにも相談したことがない」「選択肢にない／まだ先のこと」「無回答」を除けば、7つのいずれの質問においても「指導教員」がもっとも多く選択されました。指導教員に相談することが特に多い項目は、「テーマ設定」(53.3%)、「研究・調査の進め方」(48.4%)、「修士論文または博士論文の執筆」(48.8%)でした【図表V-24】。それ以外の4つについては、「選択肢にない／まだ先のこと」がもっとも多く選ばれました。

図表 V-24 研究活動で相談した際、もっとも力になってくれた人（「指導教員」を選んだ割合） 大学院生全体



研究についての様々な経験を聞いてみたところ、「インフォーマルな勉強会への参加」(59.6%)と「学外の研究会等への参加」(43.6%)については、半数前後の学生が経験したことがありました。また「国内への学会報告」(19.1%)は全体の2割弱の大学院生が経験しています。これらの学生の多くは博士後期課程の学生であると思われます【図表V-25】。

図表 V-25 研究についての経験 大学院生全体



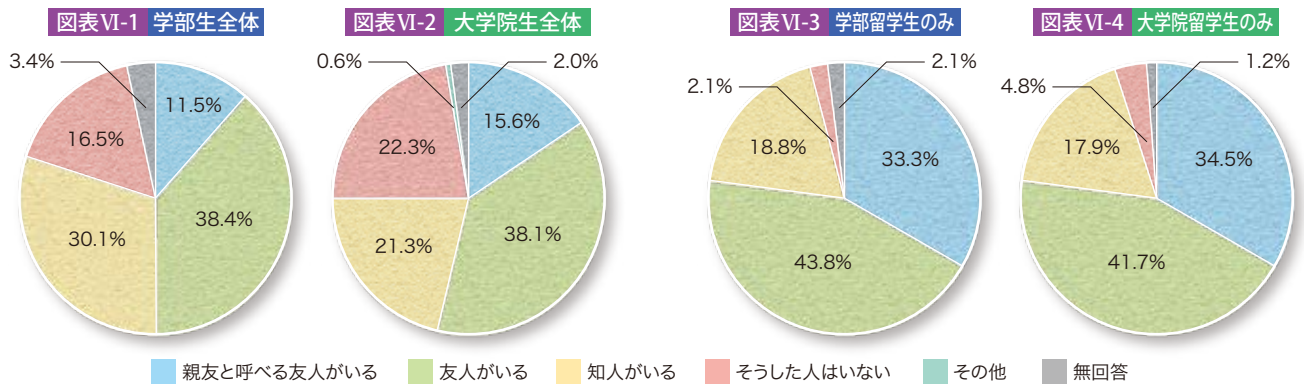
VI

学生生活について

学部生 大学院生

大学内に自分と国籍もしくはエスニシティの異なる友人・知人がいない学部生は16.6%、院生は22.3%でした【図表VI-1、図表VI-2】。約8割の学生が国際交流を行っています。また、国籍もしくはエスニシティの異なる親友がいると答えた学生も1割程度いました。他方で、留学生のみで見れば、そうした友人・知人が全くいない学部留学生は2.1%、大学院留学生は4.8%となります。国際交流が限られている学生の比率は大きく減少します。しかし、自分と国籍もしくはエスニシティの異なる友人・知人がいない留学生というのは、出身国（もしくはエスニシティ）が同じ人たちとだけ交流を持ち、日本人の友人・知人もいないということになりますので、これらの学生の交流関係はかなり限られていると言えるでしょう【図表VI-3、図表VI-4】。

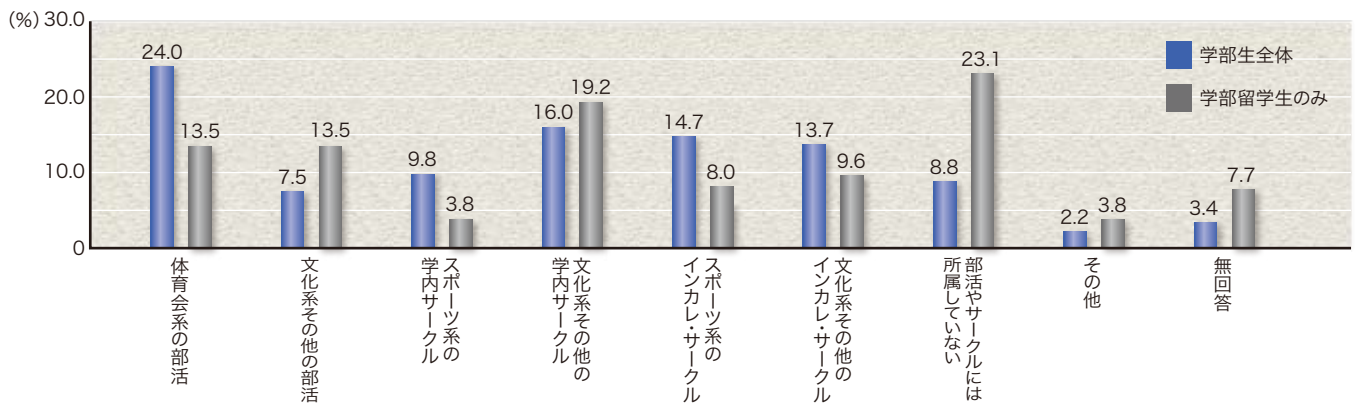
「大学内に自分と国籍もしくはエスニシティの異なる友人はいるか」への回答



学部生にとって部活・サークルの活動は学生生活のかなりの比重を占めています。部活やサークルに所属していない学部生は8.8%であり、大半が所属していることがわかります。所属先は体育会系の部活が24.0%と最も多くなっています。他方で、留学生のみで見れば、部活やサークルに所属していない学部生が23.1%と最も多く、日本人学生との違いが見られます【図表VI-5】。

図表VI-5 部活やサークルへの所属状況

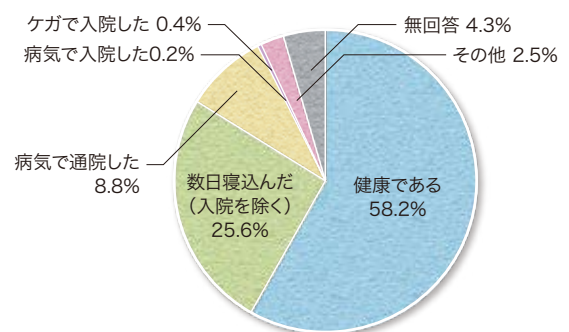
学部生全体 学部留学生のみ



大学院生を対象とした調査では、この一年間の健康状態について尋ねています。「健康である」と答えた大学院生は58.2%であり、平成21年度に行われた前回調査の67.4%よりも下がっていました。風邪などで数日寝込んだ院生は25.6%であることを含めれば、約8割の院生の健康状態は良好であったことがわかります【図表VI-6】。

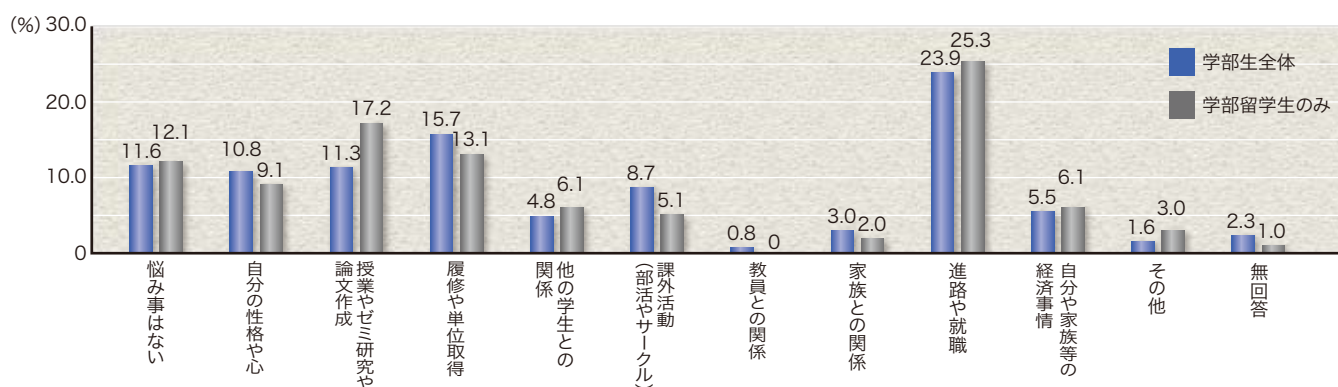
図表VI-6 この一年間の健康状態

大学院生全体

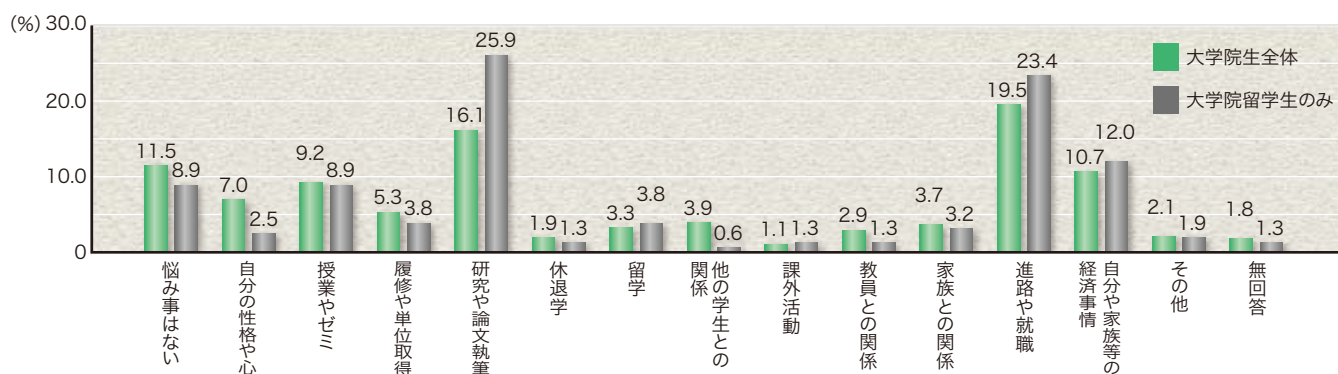


現在の悩みごとは学部生も院生も進路や就職についてが最も多く(学部生23.9%、院生19.5%)、将来への不安が高いことがわかります。次いで割合が高いのは学部生では履修や単位取得、院生は研究や論文執筆についてという学業面でした。院生の第一位と第二位の悩みごとの順位は平成21年度の前回調査では逆でした。その後、院生の進路や就職についての悩みが増加していることがわかります。また、悩みごとが全くない学部生は11.6%、院生は11.5%と同程度であることから、約9割の学生は何らかの悩みごとを抱えていることがわかります。他方で、留学生については学部生でも院生でも、授業や論文執筆についてと進路就職についての悩みが多く見られ、日本人学生と同様の傾向がうかがえますが、兵役についての悩みなど留学生特有のものも見られました【図表VI-7、図表VI-8】。

図表VI-7 現在の悩み事について 学部生全体 学部留学生のみ

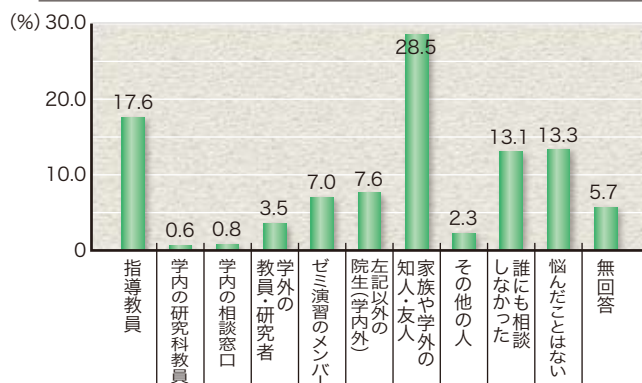


図表VI-8 現在の悩み事について 大学院生全体 大学院留学生のみ



大学院生調査では、悩みの種類別に困った時の相談相手について尋ねています【図表VI-9、図表VI-10、図表VI-11、図表VI-12、図表VI-13】。悩みの相談相手としては、進路選択、就職活動、経済的な問題では家族や学外の知人・友人が最も多くなっています。

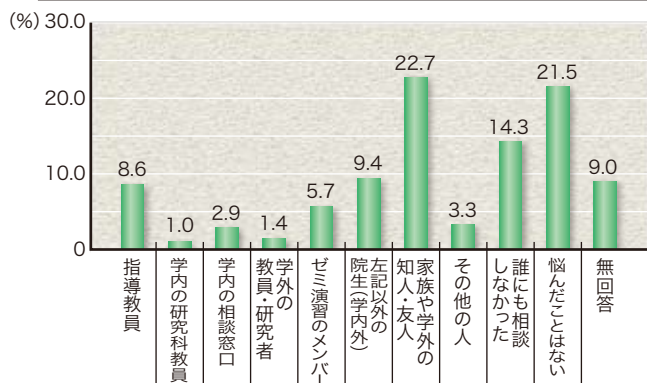
図表VI-9 進路選択の悩みを抱えた際に一番の相談相手となってくれた人 大学院生全体



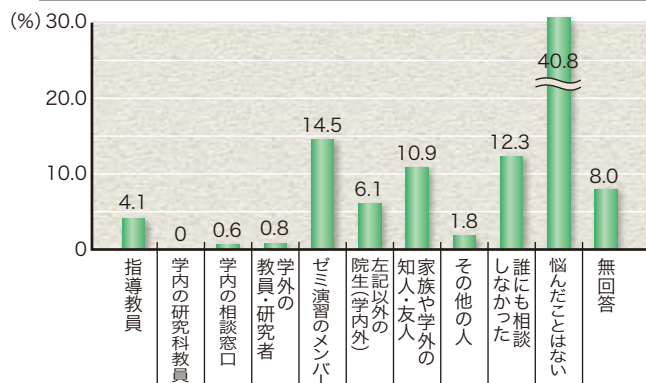
学生生活について

学部生 大学院生

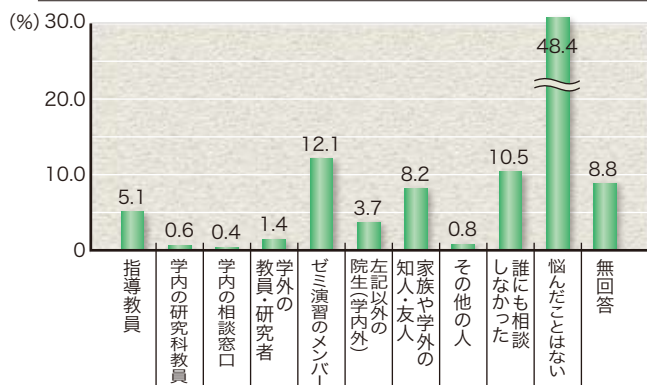
図表VI-10 就職活動の悩みを抱えた際に一番の相談相手となってくれた人 大学院生全体



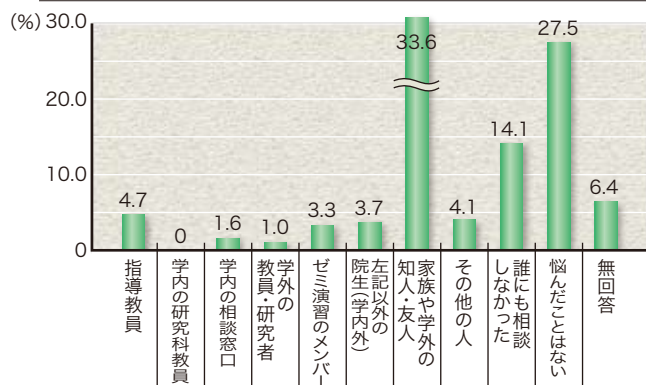
図表VI-11 ゼミ(演習)での人間関係の悩みを抱えた際に一番の相談相手となってくれた人 大学院生全体



図表VI-12 指導教員との関係について悩みを抱えた際に一番の相談相手となってくれた人 大学院生全体

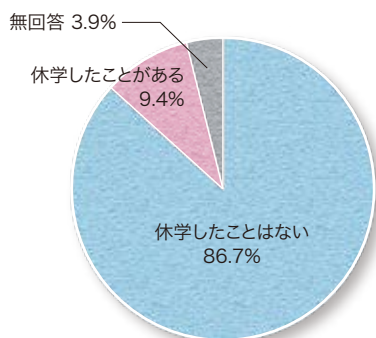


図表VI-13 経済的な問題で悩みを抱えた際に一番の相談相手となってくれた人 大学院生全体

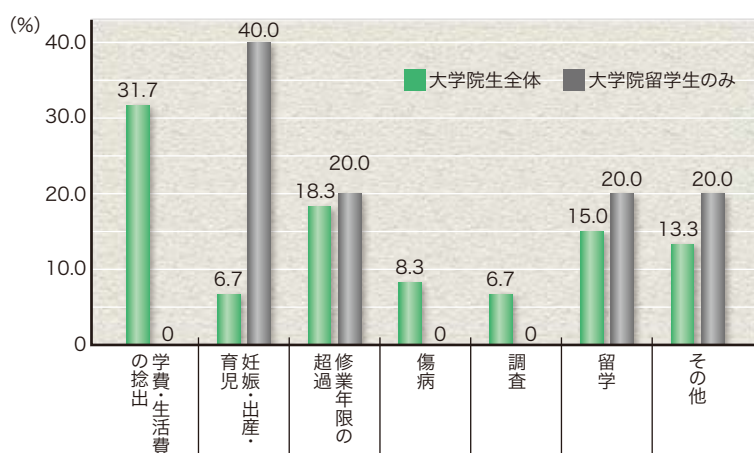


休学については9.4%の大学院生はしたことがあり、その理由としては、学費・生活費の捻出という経済的な理由が31.1%と最も多くみられました。留学生については妊娠・出産・育児という理由が最も多く、40.0%でした[図表VI-14、図表VI-15]。子育てに関する支援を求める声も自由記述では見られました。

図表VI-14 休学の経験について 大学院生全体



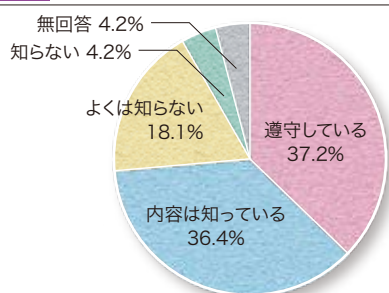
図表VI-15 休学の理由 大学院生全体 大学院留学生のみ



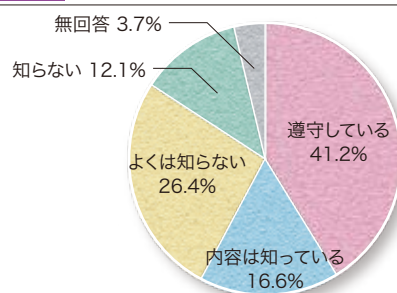
大学生活について定めているルールや指針については、学部生と大学院生の両者に尋ねています。飲酒に関する基本的原則を遵守したり、内容をよく知っている学部生は73.6%、院生は57.8%であり、基本的原則が浸透しているとは言い切れない結果となりました【図表VI-16、図表VI-17】。ただし、実際に注意をされたことがある学部生は2.1%、院生は0.8%と少数でした【図表VI-18、図表VI-19】。ほとんどの学生が飲酒に関するルールを守っていると考えられます。

キャンパス内における音響ガイドラインについて遵守したり、内容をよく知っている学部生は19.0%、院生は21.7%であり、大半が知らない状況であることがわかりました【図表VI-20、図表VI-21】。ただし、これも実際に注意をされたことがある学部生は1.9%、院生は2.0%と少数でした【図表VI-22、図表VI-23】。

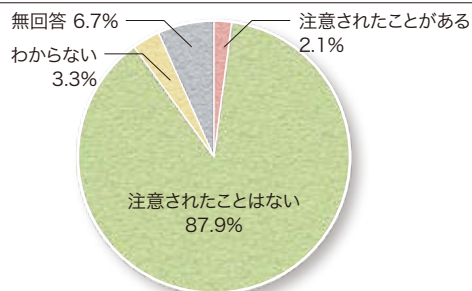
図表VI-16 飲酒に関する基本事項の認識 学部生全体



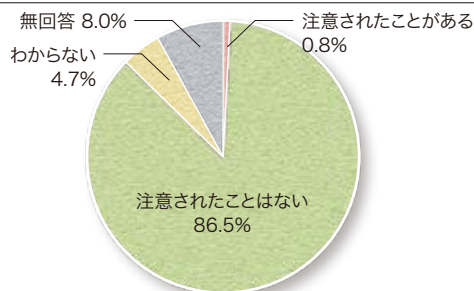
図表VI-17 飲酒に関する基本事項の認識 大学院生全体



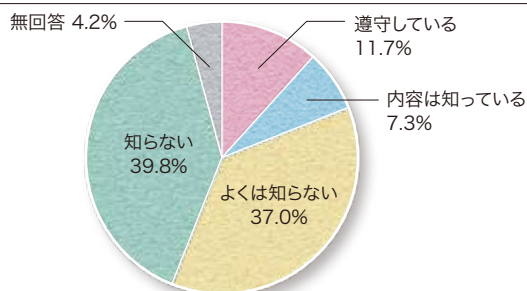
図表VI-18 飲酒について、違反を注意されたことがあるか 学部生全体



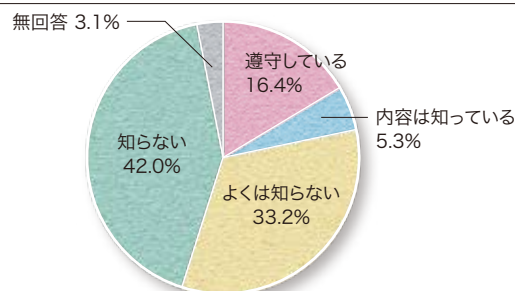
図表VI-19 飲酒について、違反を注意されたことがあるか 大学院生全体



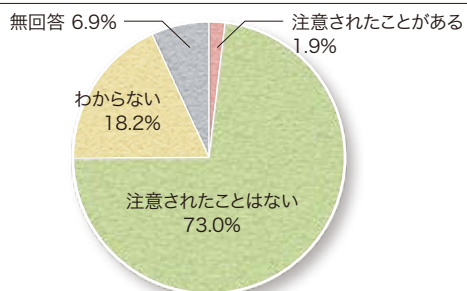
図表VI-20 キャンパス内における音響ガイドラインの認識 学部生全体



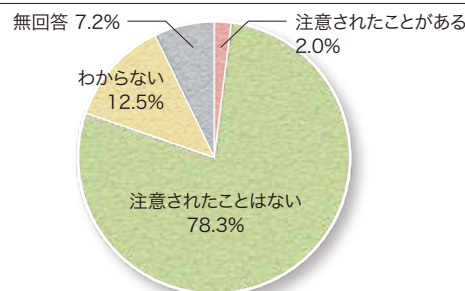
図表VI-21 キャンパス内における音響ガイドラインの認識 大学院生全体



図表VI-22 音響について違反を注意されたことがあるか 学部生全体



図表VI-23 音響について違反を注意されたことがあるか 大学院生全体



VII

大学が行なっている各種の支援について

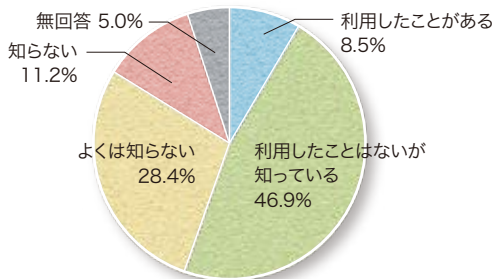
大学が行っている支援について、まず経済的な支援をみていきます。

授業料免除は8.5%の学部生が利用しています。他方で、学部生の留学生のみでみれば39.6%が利用しており、日本人学生との差が大きいことがわかります。また、授業料免除について「知らない」と回答した学部生は11.2%でした【図表VII-1、図表VII-2】。

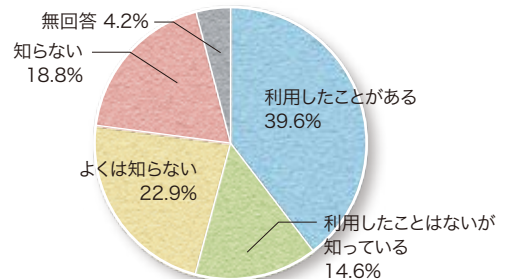
学生金庫による短期融資についての利用度は1.4%で、この制度を「知らない」と答えた学部生は33.6%でした。留学生については10.4%が利用しており、経済的に困窮する留学生の多さが伺えます【図表VII-3、図表VII-4】。各種奨学金の斡旋については利用度は11.9%で、「知らない」と答えた学生は15.1%でした【図表VII-5】。各種アルバイトの斡旋については利用度は8.7%で、「知らない」と回答した学生は10.5%でした【図表VII-6】。各種海外留学奨学金の斡旋については、利用度は3.1%で、「知らない」と答えた学生は12.4%でした【図表VII-7】。

学生支援課を中心として大学が行っている経済支援のそれぞれについて、ある一定数の利用があることがわかりました。特に留学生にとっては、経済支援が有効に働いていることが多いようです。

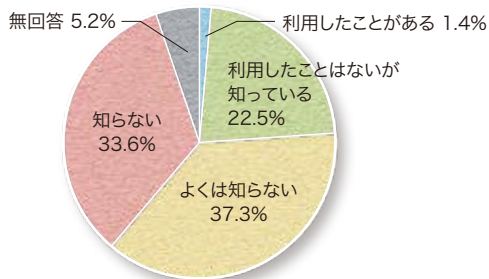
図表VII-1 授業料免除の認知・利用状況 学部生全体



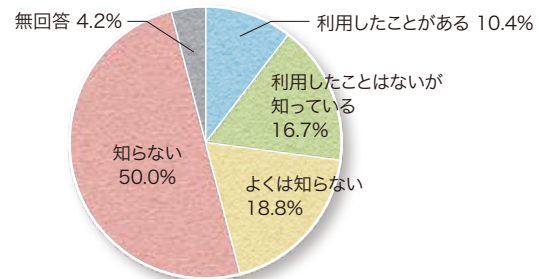
図表VII-2 授業料免除の認知・利用状況 学部留学生のみ



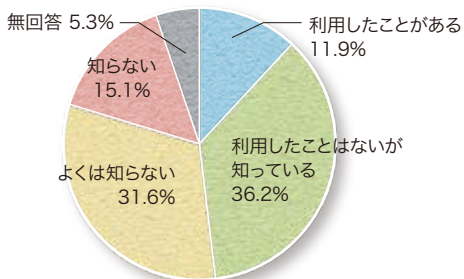
図表VII-3 学生金庫による短期融資の認知・利用状況 学部生全体



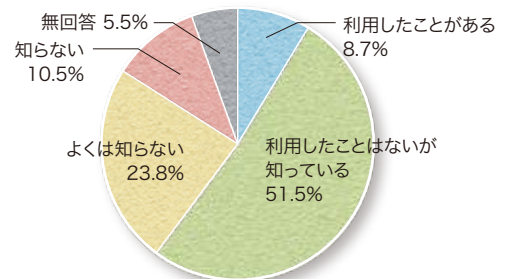
図表VII-4 学生金庫による短期融資の認知・利用状況 学部留学生のみ



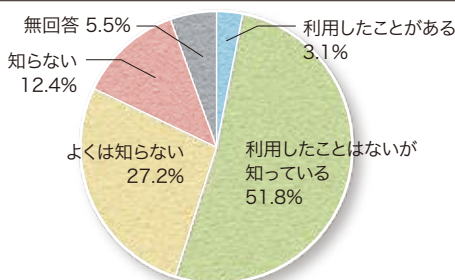
図表VII-5 各種奨学金の斡旋の認知・利用状況 学部生全体



図表VII-6 各種アルバイト斡旋の認知・利用状況 学部生全体



図表VII-7 各種海外留学奨学金斡旋の認知・利用状況 学部生全体

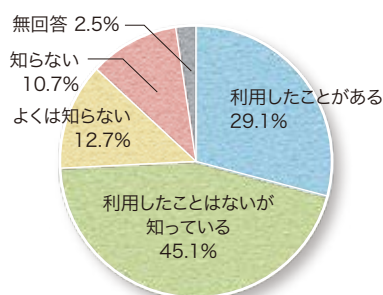


学部生 大学院生

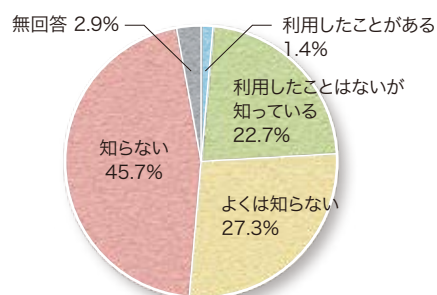
同様の支援について、大学院生の結果を見ることにしましょう。授業料免除については、「知らない」と回答した学生が10.7%と学部生とほぼ同じ比率となりました。ただし、この制度を利用したことがある大学院生は29.1%と学部生の比率を大きく上回っています【図表Ⅶ-8】。

学生金庫による短期融資については、今回の調査で新規に尋ねています。制度の存在自体について、「知らない」と答えた大学院生は45.7%にのぼり、学部生における比率を上回っています【図表Ⅶ-9】。

図表Ⅶ-8 授業料免除の認知・利用状況 大学院生全体

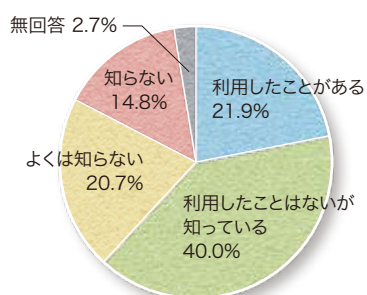


図表Ⅶ-9 学生金庫による短期融資の認知・利用状況 大学院生全体



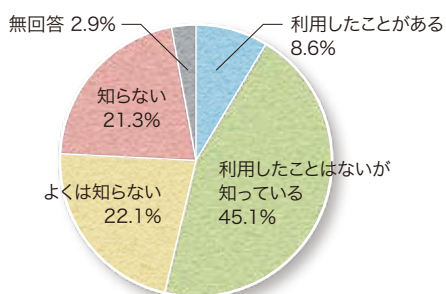
奨学金斡旋についても「知らない」と回答した学生の比率は学部生よりも高くなっています【図表Ⅶ-10】。

図表Ⅶ-10 各種奨学金の斡旋の認知・利用状況 大学院生全体

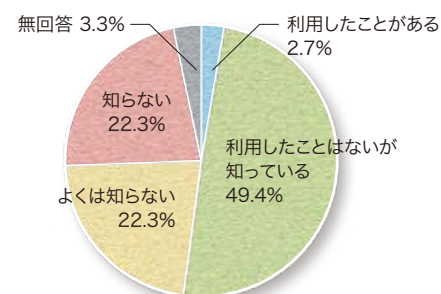


アルバイト斡旋と海外留学奨学金斡旋についても同様で、「知らない」と答えた学生の比率は学部生のときより高くなっています【図表Ⅶ-11、図表Ⅶ-12】。

図表Ⅶ-11 各種アルバイト斡旋の認知・利用状況 大学院生全体



図表Ⅶ-12 各種海外留学奨学金斡旋の認知・利用状況 大学院生全体



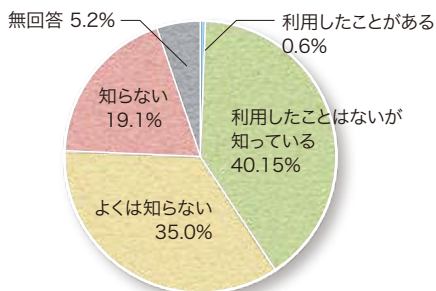
大学が行なっている各種の支援について

次に学生支援のための相談機関・相談ツールの利用度とその制度を「知らない」と答えた学生の比率を、まずは学部生に関して見ていくことにしましょう。それぞれの利用度と「知らない」と答えた学生の比率については、以下に示す通りです【図表VII-13、図表VII-14、図表VII-15、図表VII-16、図表VII-17、図表VII-18】。

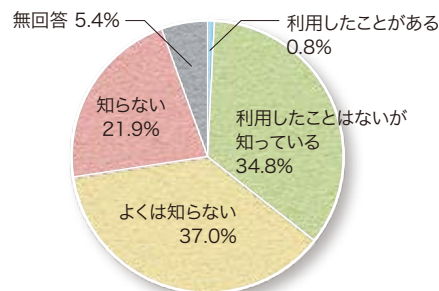
- ・セクシャル・ハラスメントの相談は0.6%、19.1%（前者が利用度、後者が「知らない」と答えた学生の比率：以下同様）。
- ・アカデミック・ハラスメントの相談は0.8%、21.9%。 ・保健センターでの相談については10.1%、13.6%。
- ・学生相談室の相談について4.5%、13.8%。 ・キャリア支援室での相談は13.6%、12.1%。
- ・学生意見箱や学長メールについては0.7%、30.6%。

以上の様々な相談機関・相談ツールの利用度と認知度はそれほど高くはありませんが、問題が少なければこれらの数字も小さくなる傾向があると思われますので、利用度・認知度がそれほど高くないことがよくないことだとも言えません。この生活調査をきっかけにはじめて相談機関・相談ツールを知り、今後利用したいという意見も自由記述で見られました。

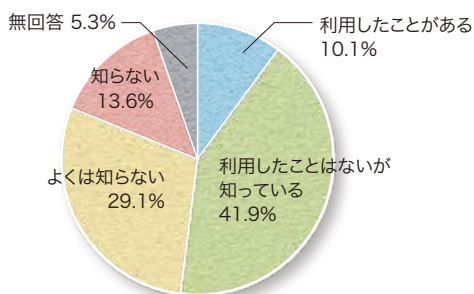
図表VII-13 セクシャル・ハラスメントの相談窓口の利用・認知状況 学部生全体



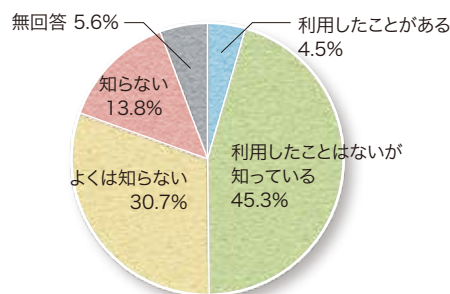
図表VII-14 アカデミック・ハラスメントの相談窓口の利用・認知状況 学部生全体



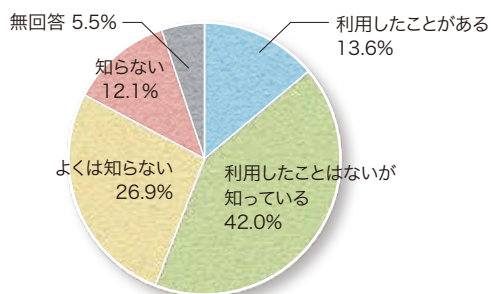
図表VII-15 保健センターでの相談業務の利用・認知状況 学部生全体



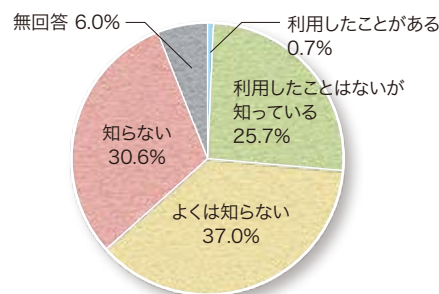
図表VII-16 学生相談室の利用・認知状況 学部生全体



図表VII-17 キャリア支援室での相談業務の利用・認知状況 学部生全体



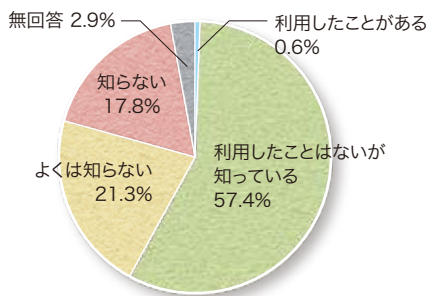
図表VII-18 学生意見箱や学長メールの利用・認知状況 学部生全体



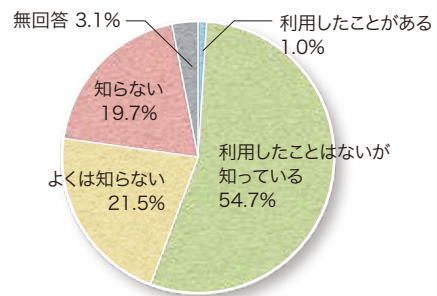
学部生 大学院生

続いて、大学院生の状況を示します。セクシャル・ハラスメントの相談については、17.8%の大学院生が「知らない」と回答しているものの、「知らない」「よくは知らない」と答えた院生の比率は、平成21年度に行った前回の調査に比べてほぼ半減しており、周知努力の成果が現れているようです【図表Ⅶ-19】。アカデミック・ハラスメントの相談についても「知らない」「よく知らない」と答えた院生の比率は前回調査に比べ半減しています。制度の存在は前回調査に比べて飛躍的に知られるようになっていきます【図表Ⅶ-20】。

図表Ⅶ-19 セクシャル・ハラスメントの相談窓口の利用・認知状況 大学院生全体

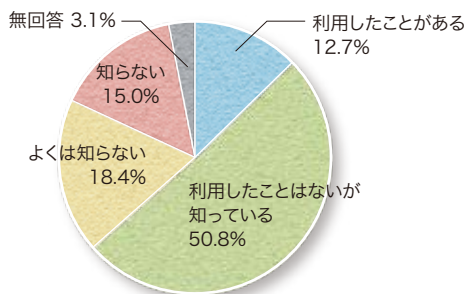


図表Ⅶ-20 アカデミック・ハラスメントの相談窓口の利用・認知状況 大学院生全体

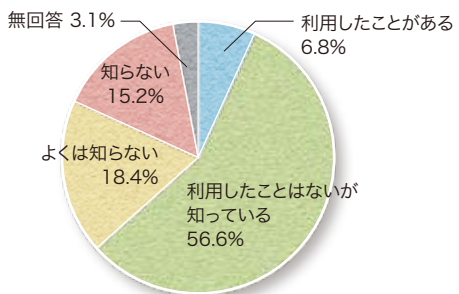


保健センターについては、「利用したことがある」という回答の率が12.7%となり、前回調査から微増しています【図表Ⅶ-21】。学生相談室についても、「利用したことがある」という回答は前回とあまり変化がありません【図表Ⅶ-22】。

図表Ⅶ-21 保健センターでの相談業務の利用・認知状況 大学院生全体



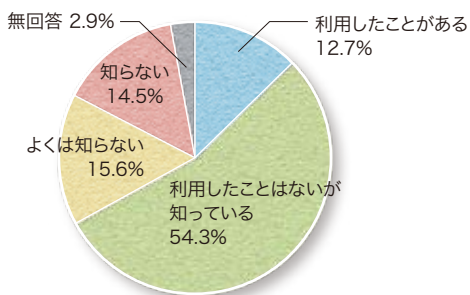
図表Ⅶ-22 学生相談室の利用・認知状況 大学院生全体



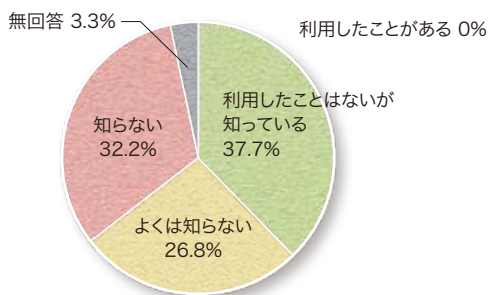
キャリア支援室については、前回調査では9割近くの学生・院生がその必要性を主張していました。しかし、今回の調査結果を見ると、院生については、「利用したことがある」と回答した率は12.7%にとどまっています【図表Ⅶ-23】。

学生意見箱や学長メールの利用度は0%という結果となりました【図表Ⅶ-24】。

図表Ⅶ-23 キャリア支援室での相談業務の利用・認知状況 大学院生全体



図表Ⅶ-24 学生意見箱や学長メールの利用・認知状況 大学院生全体



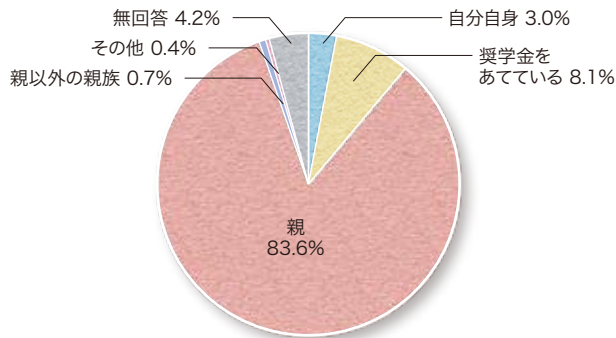
VIII

経済的な状況について

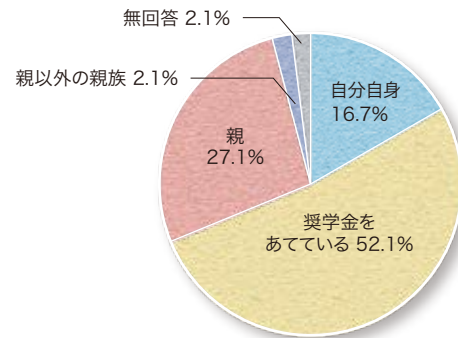
学部生 大学院生

本学では、8割以上の学部生が主に親からの仕送りを授業料や勉学費に充てています【図表Ⅷ-1】。ただし、外国人留学生に関しては、親が学費を主に支援すると回答した人は全体の3割にも満たず、反対に奨学金を主たる収入源と回答している人が全体の5割以上となっており、日本人学部生と大きな違いが見られます。さらには、アルバイト等で、自ら学費相当分の収入を確保している割合が多いのも、外国人留学生の特徴といえるでしょう【図表Ⅷ-2】。

図表Ⅷ-1 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 学部生全体

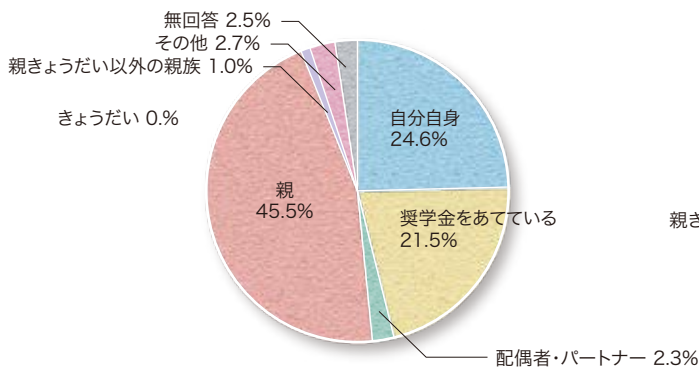


図表Ⅷ-2 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 学部留学生のみ

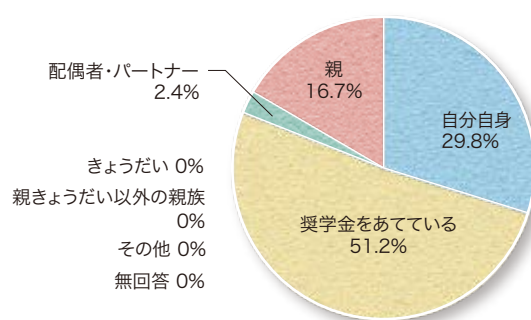


大学院生が親に授業料や研究活動費を提供してもらっている割合は全体の半分以下です【図表Ⅷ-3】。家族からの仕送りに頼らない分、学部生と比較すると、学費を奨学金や自己収入から拠出する院生が多い(学部生11.1%, 大学院生46.1%)ことがわかります。また学部生同様、外国人留学生が親に学費を依存できる度合いは日本人大学院生に比べて低く、その半面奨学金のニーズが高いことがうかがえます【図表Ⅷ-4】。

図表Ⅷ-3 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 大学院生全体

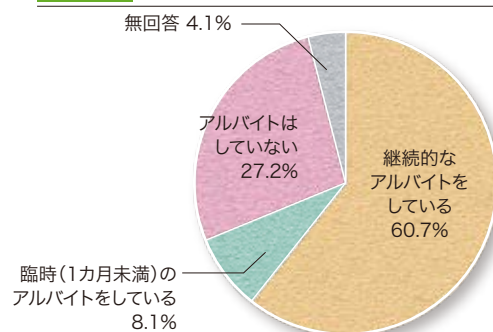


図表Ⅷ-4 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 大学院留学生のみ

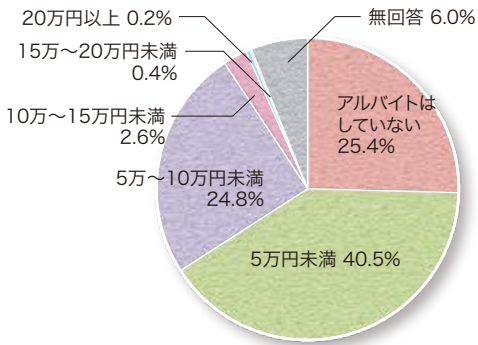


現在アルバイトをしている学部生の割合は全体の68.8%です【図表Ⅷ-5】。学部生の65%は月額収入が10万円以下のアルバイトに従事しています【図表Ⅷ-6】。アルバイト代の多くは生活費、娯楽費、貯金などに充てられており、家族からの仕送りの補完的な収入源であることがわかります【図表Ⅷ-7】。アルバイトの状況に関して、日本人学部生と学部外国人留学生に大きな差異は見られませんでした。

図表Ⅷ-5 現在アルバイトを含む就労に従事しているか 学部生全体



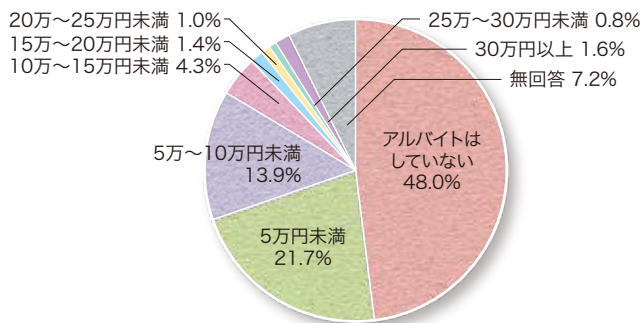
図表Ⅷ-6 最近1カ月のアルバイトによる収入 学部生全体



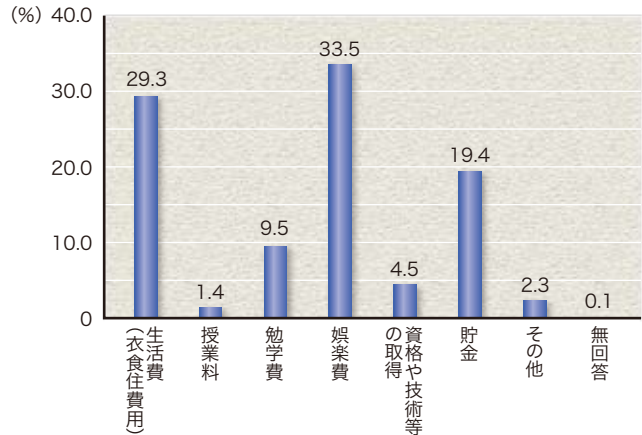
学部生と大学院生を比較して大きく異なるのは、アルバイトや就労に従事していない院生の割合が49.8%となっており、学部生でアルバイトに従事していない学生の割合(27.2%)を大きく上回っていることです【図表Ⅷ-8、図表Ⅷ-9、図表Ⅷ-10】。

学部生と比較すると、大学院生は奨学金やアルバイト以外での自己収入を確保しながら、授業や研究活動により多くの時間を割り当てているということでしょうか。アルバイトを含む就労状況に関して、日本人学部生と学部外国人留学生に差異は見られませんでした。

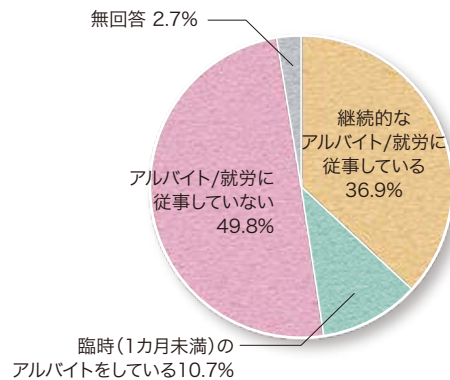
図表Ⅷ-9 最近1カ月のアルバイトによる収入 大学院生全体



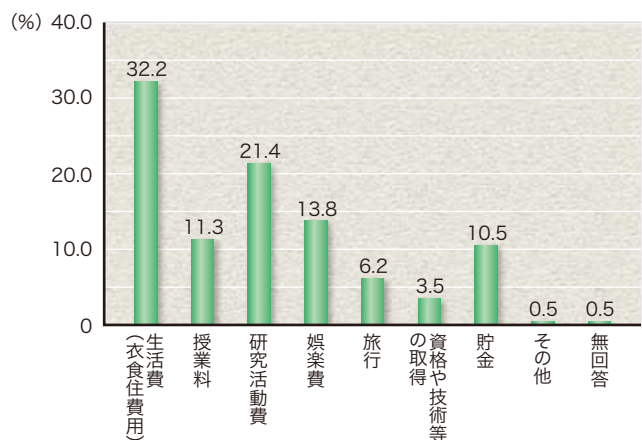
図表Ⅷ-7 アルバイトによる収入の使い道(該当するものすべて) 学部生全体



図表Ⅷ-8 現在アルバイトを含む就労に従事しているか 大学院生全体



図表Ⅷ-10 アルバイトによる収入の使い道(該当するものすべて) 大学院生全体



IX

進路計画について 学部生

学部生対象調査では、進路計画について、「卒業後の進路」、「どのような職業につきたいか」、「職業を選ぶ時に大切にすること」の3つを尋ねています。

学部生全体(回答者数1590名)に尋ねた「卒業後の進路」は、「就職する」が76.1%と最も多く、4分の3を占めています【図表IX-1】。「大学院に進学する」は「一橋大学の大学院に進学する」(8.4%)と「国内他大学の大学院に進学する」(2.8%)を合わせて約1割でした。なお、「わからない」という回答も8.1%を占めています。

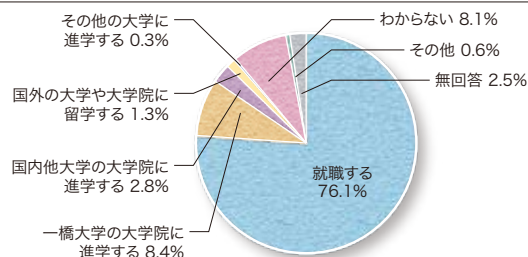
「どのような職業につきたいか」は該当するものを3つ選んでもらいました。なお、卒業後の職業が決まっている人にはその職業を1つ選んでもらいました【図表IX-2】。上位5番目までは、「営業職」(23.1%)、「事務職」(19.2%)、「行政職(公務員)」(12.3%)、「マスコミ(記者、アナウンサー、プロデューサー等)」(8.9%)、「専門職(弁護士、公認会計士等)」(8.4%)の順でした。「大学や公的機関の教育研究職」(4.5%)と「企業等の研究職」(6.0%)の教育研究職は合計すると約1割と、卒業後の進路として大学院進学を考えている比率に近い結果でした。ただし、この設問は3つまでの複数回答ができることに留意する必要があります。

職業を選ぶ時に大切にすることの設問も先の設問と同様に該当するものを3つ選んでもらいました。比率の高い順に、第1位「やりがいがある」(22.7%)、第2位「人や社会の役に立つことができる」(19.6%)、第3位「安定した生活が保証されている」(14.7%)、第4位「高収入が期待できる」(14.5%)で、比率が10%を超えたのはこれら4つだけです【図表IX-3】。

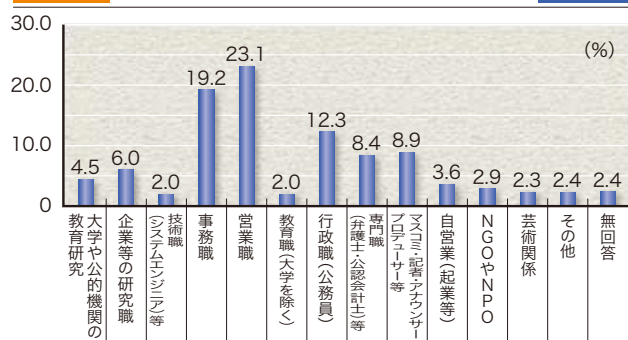
学部生のうち、留学生(回答者数48名)についての集計結果を見ると、卒業後の進路に関しては、「一橋大学の大学院に進学する」(12.5%)と同じ比率で「国外の大学や大学院に留学する」(12.5%)という回答があり、留学志向の相対的な高さがうかがわれます【図表IX-4】。

また、留学生の「職業を選ぶ時に大切にすること」の回答をみると、学部生全体で上位の4項目の回答は共通しているものの、同率4位で「将来発展する見込みがある」(12.7%)が入っている点が特徴的です。この項目は学部生全体では比率6.0%にとどまっています【図表IX-5】。

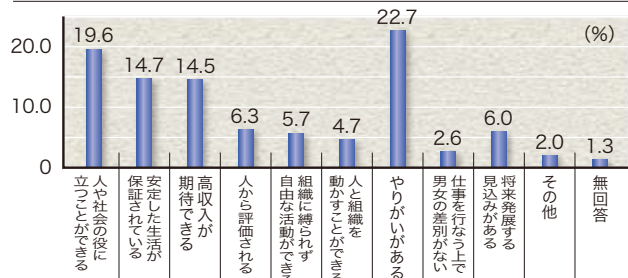
図表IX-1 卒業後、どのような進路をとりたいか 学部生全体



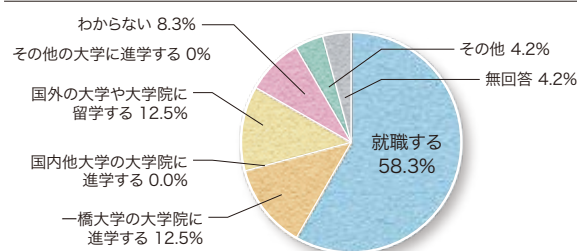
図表IX-2 どのような職業につきたいか(複数回答・該当するもの3つ選択) 学部生全体



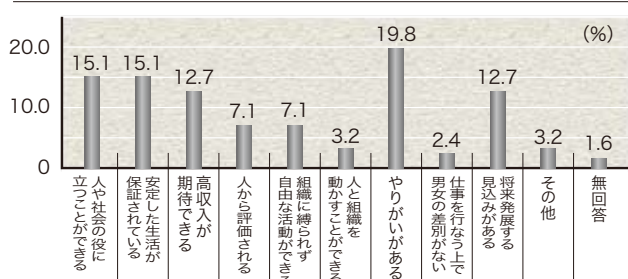
図表IX-3 職業を選ぶ時に大切にすること(複数回答・該当するもの3つ選択) 学部生全体



図表IX-4 卒業後、どのような進路をとりたいか 学部留学生のみ



図表IX-5 職業を選ぶ時に大切にすること(複数回答・該当するもの3つ選択) 学部留学生のみ





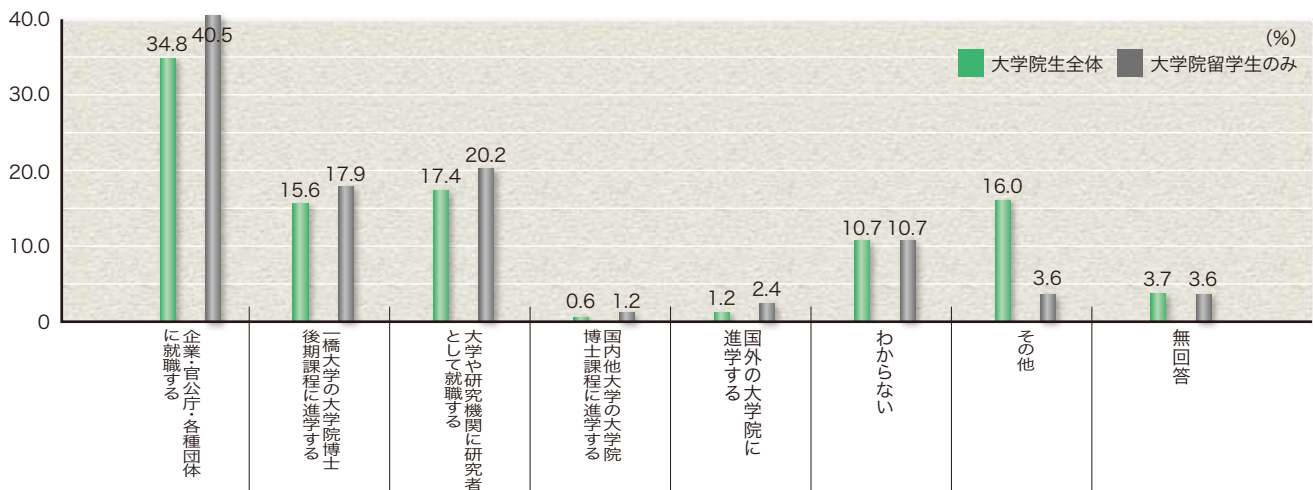
進路計画について 大学院生

大学院生対象調査では、就職活動について、課程修了後、「どのような進路をとりたいか」、「どのような職業につきたいか」、「希望進路を決めた時期」、「現在の進路を希望するようになった理由(希望進路として「企業・官公庁・各種団体に就職する」と答えた人のみ)」、「大学院に進学後、進路に迷いが生じたことはあるか」の5つの設問への回答を求めています。

「課程修了後の進路」についての回答で、大学院生全体と留学生のみを比較すると、どちらももっとも多いのは「①企業・官公庁・各種団体に就職する」で、大学院生全体で34.8%、留学生では40.5%を占めています。2番目に多いのは、③大学や研究機関に研究者として就職する(大学院生全体で17.4%、留学生のみを取り出すと20.2%)です。なお、留学生と比較すると大学院生全体では「⑦その他」が16.0%と目立って多い結果になっています。これは「その他」と回答した人の自由記入欄をみると明らかですが、「法曹」あるいは「弁護士」といった法科大学院生の多くが希望する進路に該当する選択肢がないと判断されて「その他」と回答したためです。希望する進路に関する全体的な傾向は留学生とそれ以外で顕著な違いはみられないと言えるでしょう[図表X-1]。

図表X-1 課程修了後どのような進路をとりたいか

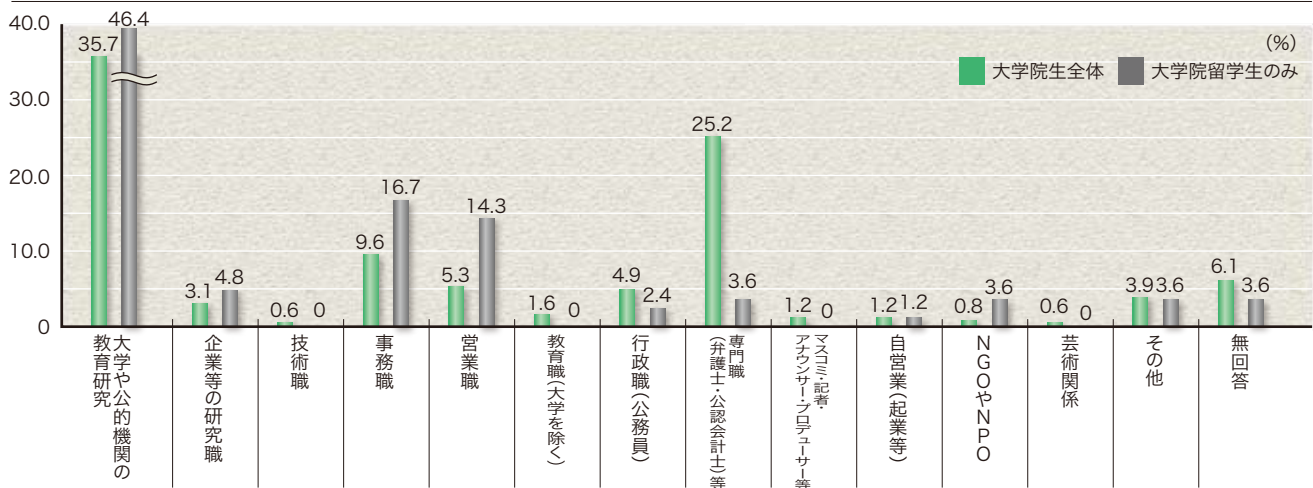
大学院生全体 大学院留学生のみ



「どのような職業につきたいか」に対する回答結果をに示しました。大学院生全体では、多い方から「①大学や公的機関の教育研究職」(35.7%)、「⑧専門職(弁護士、公認会計士等)」(25.2%)の順で、かなり離れて3番目に「④事務職」(9.6%)が登場します。これに対し、留学生では、第1位は大学院生全体と同じ「①大学や公的機関の教育研究職」(46.4%)ですが、第2位は「④事務職」(16.7%)、第3位は「⑤営業職」(14.3%)でした[図表X-2]。

図表X-2 どのような職業につきたいか

大学院生全体 大学院留学生のみ

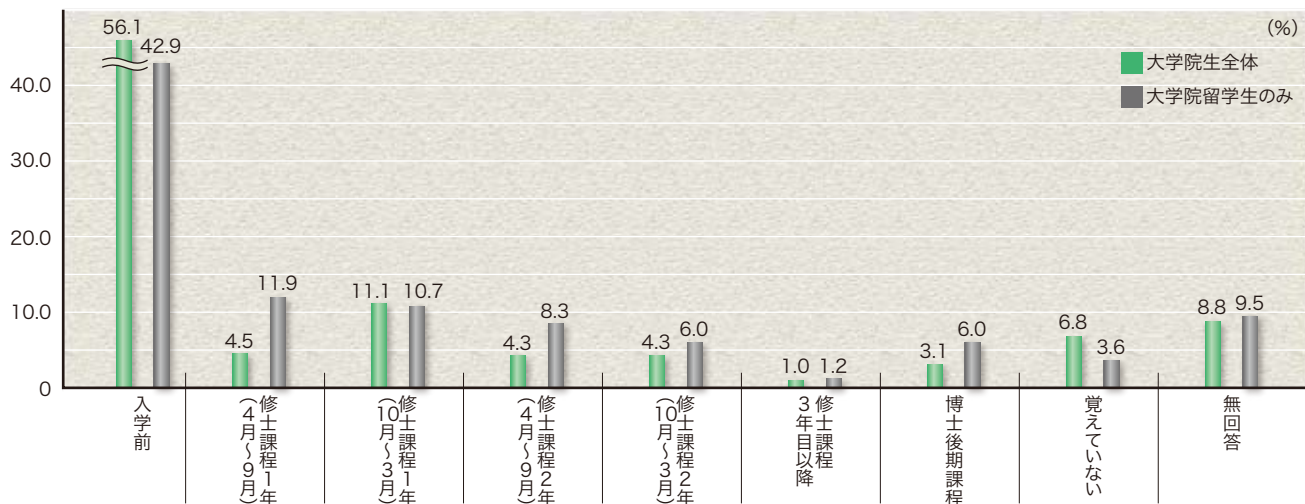


進路計画について 大学院生

「希望する進路を決めた時期」を尋ねると、大学院生全体では「①入学前」が56.1%と6割近く、留学生も「①入学前」が42.9%ともっとも多いのですが、その割合は4割強にとどまっています。この違いは、大学院全体の回答者に法科大学院生が多く含まれることと関係しているように思われます [図表X-3]。

図表 X-3 希望する進路を決めた時期

大学院生全体 大学院留学生のみ

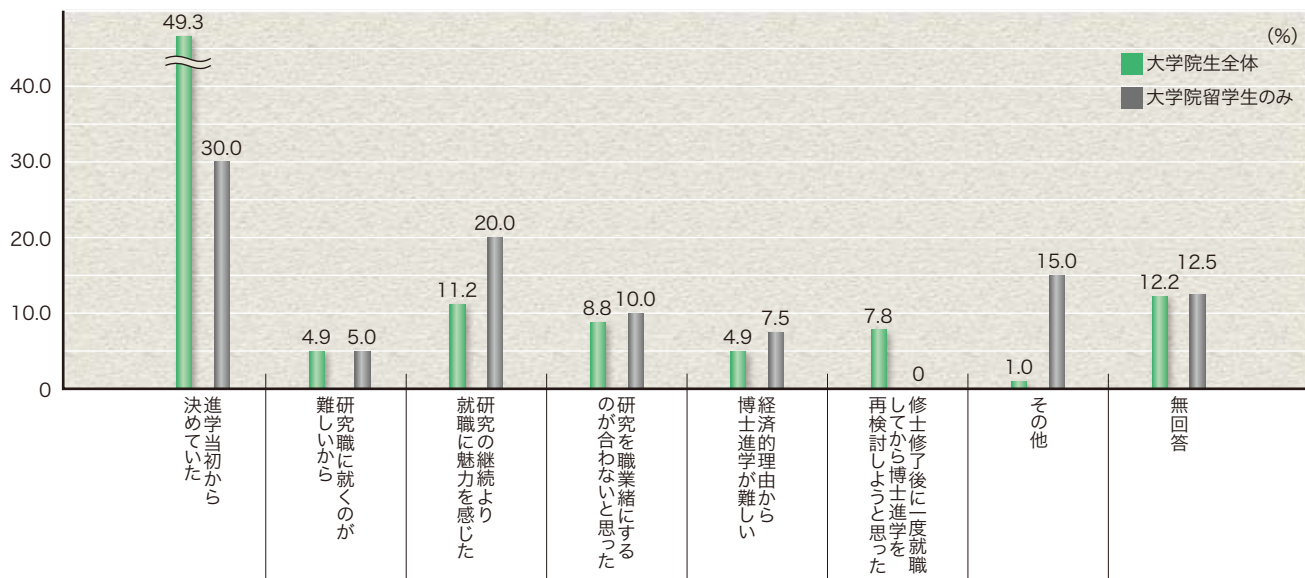


今回の調査では「課程修了後、どのような進路をとりたいか」[図表X-1:前掲]で「①企業・官公庁・各種団体に就職する」と回答した人に対し、現在の進路を希望するようになった理由を尋ねています [図表X-4]。

全体の回答をみると「①進学当初から決めていた」が49.3%と多く、ここに回答が集中しているのに対し、留学生では、「①進学当初から決めていた」(30.0%)以外にも、「③研究の継続より就職に魅力を感じた」(20.0%)や「⑥修士修了後に一度就職してから博士進学を再検討しようと思った」(15.0%)などにも回答が分散しています。

図表 X-4 現在の進路を希望するようになった理由

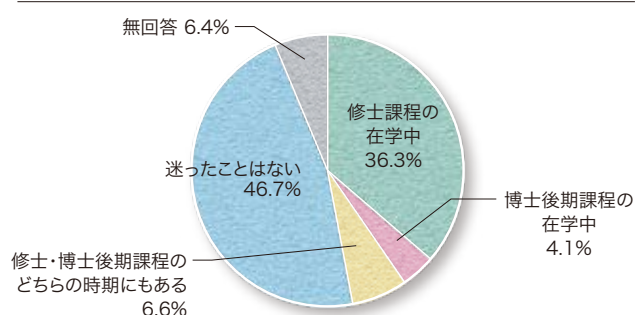
大学院生全体 大学院留学生のみ



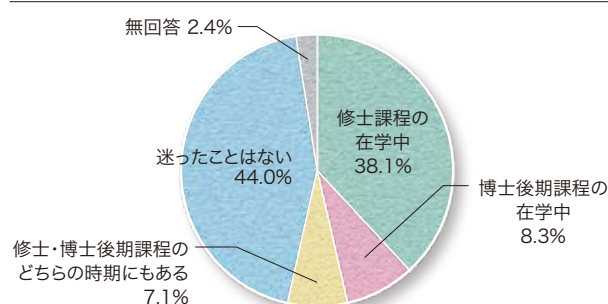
大学院生全員を対象に尋ねた「大学院に進学後、進路に迷いが生じたことはあるか」の回答結果をみると「④迷ったことはない」という回答が大学院生全体(46.7%)でも、留学生(44.0%)でも多いのですが、「①修士課程の在学中」に迷ったという回答も、大学院生全体で36.3%、留学生では38.1%と少なくありません。

博士後期課程の在学中、あるいは修士・博士後期課程のどちらの時期にも進路に迷いが生じた人も含めて考えると、大学院の在学中に進路に迷いが生じた人は留学生以外では「迷ったことはない」という人と同じくらいおり(合計46.9%)、留学生では「迷ったことはない」人を上回る比率です(合計53.6%) [図表X-5、図表X-6]。

図表X-5 大学に進学後、進路に迷いが生じたことはあるか 大学院生全体



図表X-6 大学に進学後、進路に迷いが生じたことはあるか 大学院留学生のみ



編集後記

今回の学生生活調査には、学部生1,590名、大学院生488名もの学生が協力してくれました。そのおかげで、一橋大学学生の日々の暮らしや授業やゼミへの姿勢が浮き彫りになりました。また、大学が行っている様々な支援制度の利用度や認知度に関しても貴重な情報が集まりました。自由記述欄には、学務制度に関する学生側から様々な意見も寄せられました。この生活調査が、現在、そして未来の一橋大学生・大学院生のより充実したキャンパスライフにつながっていくことを願っています。



一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

平成24年度
よりよい一橋ライフのために～学生生活調査とその分析

平成25年12月発行

編集 一橋大学学生委員会

委員長 落合 一泰 (理事 教育・学生担当副学長)

副委員長 古沢 泰治 (役員補佐 教育・学生担当)

委員 松井 剛 (商学部・商学研究科)

竹内 幹 (経済学部・経済学研究科)

酒井 太郎 (法学部・法学研究科)

山田 哲也 (社会学部・社会学研究科)

鶴飼 哲 (言語社会研究科)

阿部 仁 (国際教育センター)

林 大樹 (キャリア支援室長)

中島 正雄 (学生相談室)

発行 一橋大学学務部学生支援課

〒186-8601 国立市中 2 - 1